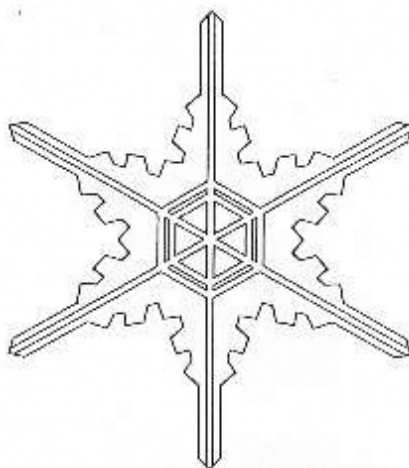


令和元年度
文部科学省事業
地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力型)

研究開発実施報告書(第1年次)

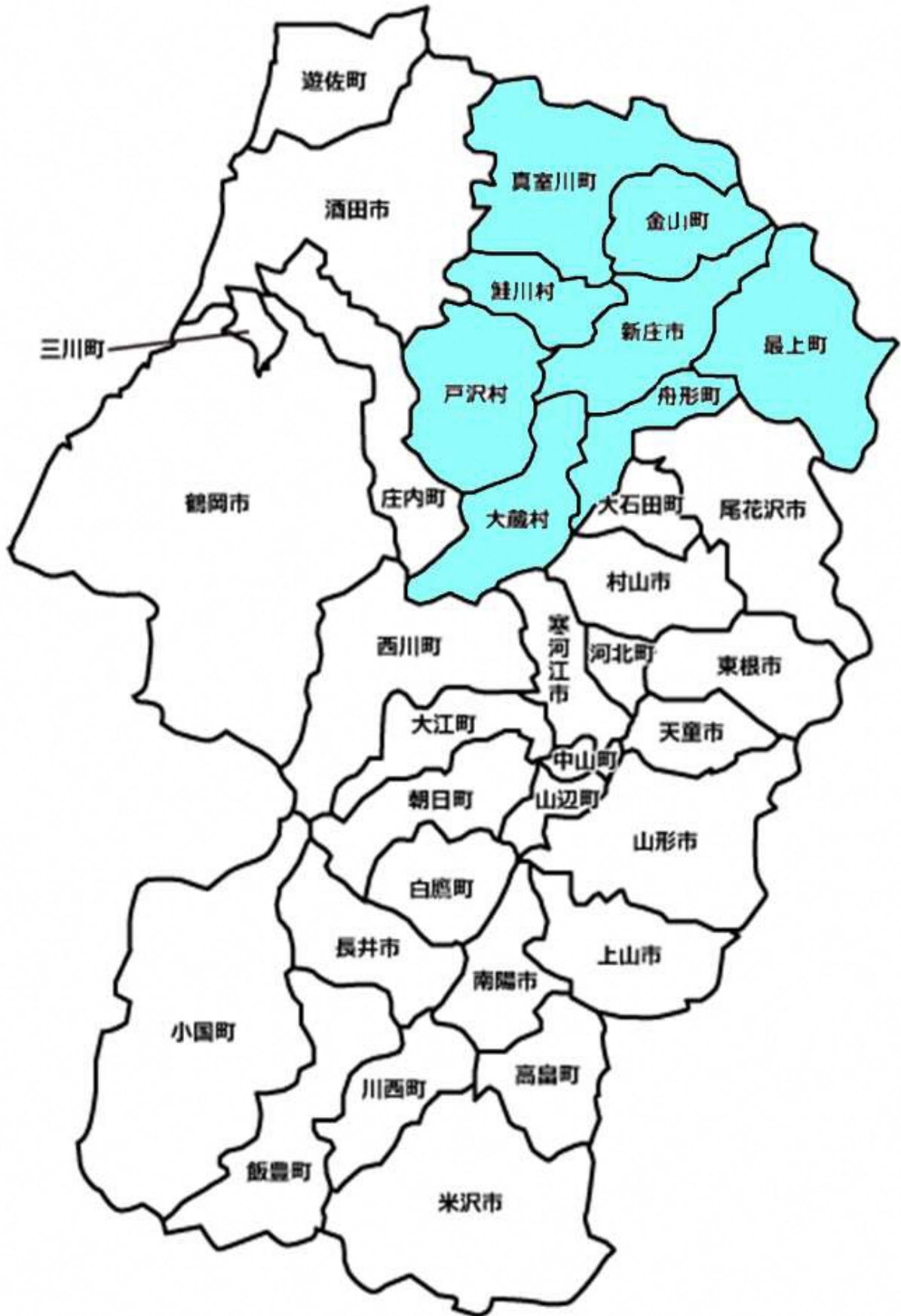
研究開発構想名

『新庄・最上LINKプロジェクト』



山形県立新庄北高等学校

山形県地図及び最上地域の位置



はしがき

2018（平成30）年、文部科学省は Society 5.0 の社会を地域から分厚く支える人材の育成に向けた教育改革を推進するため、「経済財政運営と改革の基本方針2018（2018年6月15日閣議決定）」や「まち・ひと・しごと創生基本方針2018（2018年6月15日閣議決定）」に基づき、高等学校が自治体・高等教育機関・産業界等との協働によりコンソーシアムを構築し、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を推進する「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の実践校を募集した。

学校と地域社会との連携が促された2016（平成28）年の中央教育審議会答申に先駆け、山形県立新庄北高等学校では2014（平成26）年度から地域を学びの場とする「地域理解プログラム」に取り組んできた。この取組に対しては地域の理解と協力を得ることができ、現在では学校外に多くの協力組織・機関・人材が存在している。

2018（平成30）年度、本校では普通科探究コースが設立され、本校独自の探究的な学びづくりとその中で得た力を生徒たちが発揮できる場を確保する新たな教育課程の編成が求められるようになっていた。こうした時に公示された文部科学省による「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」が育成しようとする生徒像は本校が育成を目指す生徒像と合致し、既に学校外に形成されている協力組織・機関・人材はコンソーシアムとして容易に運用できる状態となっていた。本校の願いと現状に合致する事業だったのである。

2019（令和元）年度、本校は文部科学省の助言と支援を受けつつ、少子化・高齢化・財政難と幾多の課題を抱える山形県新庄・最上地域の活性化に貢献しうる『人財』の育成を目指し、事業名を「新庄・最上LINKプロジェクト」と名付けて実施してきた。本冊子は3年間の実施期間の初年度の取り組み内容をまとめたものである。

試行錯誤を重ねる中での実践であり、改善点も少なくはないが、本事業を展開する全国の実践校及びこれから同様の実践に取り組もうとする学校の参考となれば幸いである。

令和2年3月

山形県立新庄北高等学校

新庄・最上LINKプロジェクト 研究報告書

目 次

はしがき

1 本事業の概要について
2 事業の内容	
A 地域と密着した探究型学習の推進	
A-a 地域理解プログラム
A-b 「ジモト大学」プロジェクト
A-c 地域理解発展研究
A-d 研究発表実践
A-e 地域系部活動の設置
B ICT技術の活用	
B-a 地域連携アプリの開発
B-b 情報リテラシーの醸成
C 新しいキャリア教育	
C-a アカデミックインターンシップの取組
C-b 研究実績の進路指導への活用
D 成功のカギ「教育課程の開発」	
D-a 「ふるさと科目」の開設と教材開発
D-b 学校設定科目「Myエリア・ラーニング」の開設
3 生徒の変容と2年目に向けて

1 本事業の概要について

1 事業名

地域との協働による高等学校教育改革推進事業（新庄・最上LINKプロジェクト）

2 全体計画

(1) 事業年度 開始年度 平成 31 年度

終了（予定）年度 令和 3 年度

(2) 事業目的とその必要性

地域の未来を切り開く高い志と能力を持った『人財』、すなわち

①探究心と地域の課題を解決する高い能力を持った人材

②郷土に対する誇りを持ち、社会や地域とつながる意欲にあふれる人材

③Society5.0 に変容する地域社会の中でAIやデータの力を最大限活用し展開して地域を牽引していく人材

を育成することを目的とする。

また、「学校」の改革を進めるのはもちろんであるが、学校と地域が「LINK」することで、自治体・地域住民の側の地域力を高め、地域外への人材流出が加速していた従来とは逆の『地域に戻る新しい人の流れ』をつくることを最終的な目標としたい。

(3) 事業内容

下記の4事業、及び実施に向けた研修会・視察・委員会等。

L 地域と密着した探究活動 Local area academic inquiry

探究活動（地域理解プログラム（1年）、ジモト大学、地域理解発展研究（2年探究コース）、発表実践（3年）（系統的な探究型学習）

I ICT技術の活用 Information communication technology

地域連携アプリ開発（ジモト大学への申込・集計・振返をスマートフォンで）

N 新しいキャリア教育 New carrer education

アカデミックインターンシップ（地元企業等との交流）

研究実績の進路指導への活用（AO・推薦入試、e-ポートフォリオ等）

K 成功のカギ「教育課程の開発」 Key to success

学校設定科目「Myエリアラーニング」「ふるさと探究」の設置

3 山形県立新庄北高等学校と地域の現状

山形県立新庄北高等学校は1900（明治33）年に創設された山形県新庄・最上地域の伝統校・基幹校である。2020（令和2）年に創立120周年を迎えるが、創立以来、一貫してリーダーの育成をその使命としており、地域の期待を担って幾多の人材を輩出してきた。2014（平成26）年度には進学型

単位制及び同校最上校とのキャンパス制を導入、2018（平成 30）年度には普通科探究コースを新たに設置するなど、山形県が推進している探究型学習の推進においても先導役となっている。2016（平成 28）年から 2018（平成 30）年度の卒業生の進路先でも、国公立大学を中心に 80%を超える生徒が四年制大学に進学している。

本校が位置する山形県最上地域は、山形県北東部の内陸部にあり、1 市 4 町 3 村（新庄市・金山町・最上町・舟形町・真室川町・大蔵村・鮭川村・戸沢村）から構成されている。新庄盆地を中心に周囲を高く険しい山々に囲まれ、総面積の 8 割を森林が占めている。また、地域全体が「豪雪地帯対策特別措置法」による特別豪雪地帯に指定されている。

「平成 27 年国勢調査」によると、産業構造については県平均に比べ第一次産業の従事者割合が高く、市を除く町村全てが県平均を上回っている。

人口については 1955（昭和 30）年の 128, 597 人をピークに減少が続いており、近年その減少幅が大きくなっている。平成 27 年国勢調査では 2010（平成 22）年調査に比べ、全国では 0.8%減少、山形県では 3.9%減少しているが、当該地域では 7.6%減少し、県の約 2 倍の人口減少率となっており地域の維持そのものが困難になりつつある。出生率については 2016（平成 28）年人口動態調査では 477 人であり 5 年前との比較では 64 人（11.8%）の減少となっている。高齢化率も県内平均の 32.3%を超え、34.5%となっている。こうした影響を受け、新庄・最上地域の 8 市町村のうち 6 町村が、「過疎地域自立促進特別措置法」に基づく過疎地域に指定されており、地元産業の衰退は、若者はじめ求職者の雇用創出の道を閉ざし、ますます地域社会の活力を奪っている。

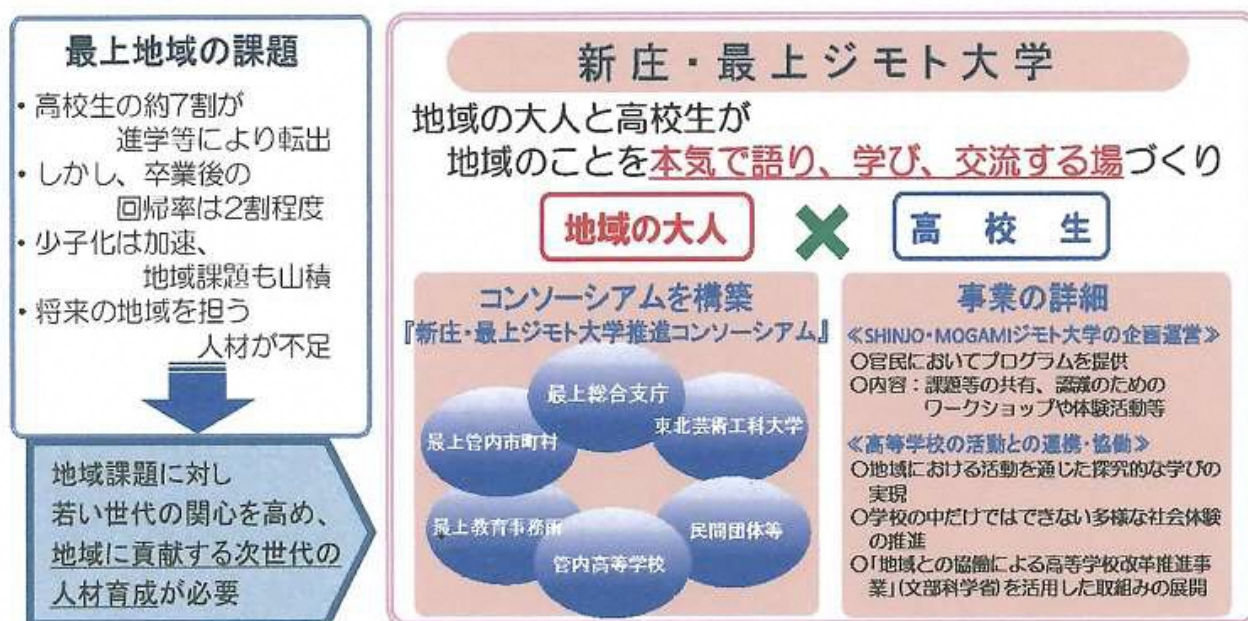
このような地域の現状を鑑み、本校で行ってきた指導は地域のためになっているのかという反省が常にあった。新庄・最上地域には大学・短期大学が立地しておらず、進学する生徒は自ずから地域外に出ることになる。高校卒業の現状では、2018（平成 30）年度学校基本調査によると 2017（平成 29）年度最上地域出身の卒業生 713 人のうち、進学は 487 人（68.3%、就職は 222 人（31.1%）となっており、進学者と県外就職者を合わせると実に 541 人（75.9%）もの生徒が高校卒業と同時に地域外に出ていっている。また、就職に関しては、県内就職率は県平均より約 10 ポイント低い状態で推移している。2015（平成 27）年度に実施した高校 2 年生対象のアンケート（n=417）においては、「地元で働きたいと思う企業があるか」との問いに対して、「ない」または「分からない」と回答した割合は 61%となっており、地元企業に魅力を感じていない、又は知らないなど、生徒に対して地元で働く場所などの必要な情報が届いていないことがわかっている。

こうした現状を背景に、本校では 2014（平成 26）年度から 1 年次の総合的な学習の時間において「地域理解プログラム」を開講している。このプログラムはキャリア教育の一環として、総合的な学習の時間において、地域課題に係る探究活動を行い、生徒の将来を展望させるものである。

この趣旨については、地域からも共感する組織がすぐに現れ、2016（平成 28）年度からは最上地域政策研究所（新庄・最上地域の 8 市町村が共通する地域課題に共同で対処する目的で設置された組織）が、「地域産業を支える人材の育成・確保」の視点から本プログラムに参画、2017（平成 29）年度には「もがみ地域理解プログラム運営委員会」を発足させ、本プログラムの対象を新庄・最上の

高校全体に拡大させた。このプログラムの重要性は新庄・最上地域の 8 市町村に共有されており、2017（平成 29）年度には各市町村からプログラムを持ち寄った「SHINJO・MOGAMI ジモト大学」プロジェクトがスタートしている。

現在は、新庄・最上地域の 8 市町村・最上総合支庁（最上地域政策研究所の上部組織）・東北芸術工科大学・最上教育事務所・地域の高校等で 2018（平成 30）年度に「新庄・最上ジモト大学推進コンソーシアム」を構築、本校の「地域理解プログラム」からスタートした高校と地域の連携が課題として地域の自治体等に共有されることとなった。



本研究は、地域の中心にあって連携を推進してきた本校が、これまでの地域連携の実践を活かしつつ、連携する大学・研究機関・企業等の協力のもと、地域連携に止まらない地域の協働のあり方の新たなモデルを開発し、本校が地域再生の核となるために行うものである。

これまでの活動を通して、地域に根差した探究型学習や地域を題材とした日常の学習を通してこそ、主体的な課題解決能力を備え、地域の未来を切り開く高い志と能力を持った『人財』の育成に繋がるという見通しを持つことができた。

従来、本校では「文武両道・質実剛健」の校是のもと、地域の期待に応える進学校として、伝統的な取り組みを続けてきた。しかし、急速に過疎化が進む中で、学校は地域と「つながり」がなければ生き残れない。そして、地域も学校の育成する「郷土に対する誇りを持ち、社会や地域とつながる意欲にあふれる人材」、「探究心と地域の課題を解決する高い能力を持った人材」がいなければ衰退していくのみである。地域の未来を切り開く高い志を持った『人財』を育成する指導体制の構築が急務となっている。

4 研究開発に対する仮説と実践概要

① 仮説

「3」で述べた実態を踏まえ、次の仮説を設定し、開発研究を進める。

仮説A「地域と密着した探究型学習」に係る仮説

- ①地域と密着した探究型学習を通し、地域の課題解決につながる実践を積むことで、地域に対する愛着が生まれ、地域に戻りたいと考える生徒が増加する。
- ②地域の課題解決につながる実践を積むことで、課題解決能力の高い生徒を育成できる。

仮説B「ICT機器の活用」に係る仮説

- ①地域連携アプリを利用することで、地域連携の取組をより効果的に進めることができる。
- ②ICT機器を地域における探究活動に活用することで、将来の情報活用能力につながる情報機器を活用する能力、プレゼンテーション能力を含むコミュニケーション能力を育成することができる。

仮説C「新しいキャリア教育」に係る仮説

- ①地元企業との連携を強化したキャリア教育により、上級学校卒業後に地域に戻りたいと考える生徒の割合が増加する。
- ②e-ポートフォリオを活用することで地域における探究活動を活用して進学する生徒の割合が増加する。

仮説D「教育課程の開発」に係る仮説

- ①地域の題材を扱った授業を受けることで、総合的な学習の時間における探究型学習をより内容の濃いものにできる。教科横断的な科目を受講することで地域の現状や課題を広い視点で捉えることができるようになる。
- ②地域の題材に関する調査研究を行うことで、教員自身の地域に対する愛着が強くなる。調査研究を通して教員の指導力が向上する。
- ③学校外における学修として単位認定することで、地域における活動を活性化できる。

②研究開発の概要

A 地域と密着した探究型学習の推進

地域と密着した探究型学習を通して、地域課題を発見解決に導くプロセスの経験を積み重ねることで、地域の未来を切り開く高い志と能力を持った『人財』を育成する。本校では平成26年度より1年次生全員に年間を通じた地域理解のための探究型学習「地域理解プログラム」を行っている。「地域理解プログラム」の実施により、教職員側の意識も変化し、生徒が地域連携に関わり、課題解決能力の伸長に向けた素地はできている。これを土台にした「地域理解発展研究」(2年次)、「研究発表実践」(3年次)を開設し、3年間を通じた探究型学習を体系的に行う。

A－a 地域理解プログラム

平成26年度から1年次生全員が履修。深い思考力、まとめる力、プレゼンテーションスキルなど探究型学習の基礎となるトレーニングを積んだ後に、地域課題解決の最前線に立つ山形県最上総合支庁から主な地域課題について問題提起してもらい、グループ単位でテーマを解決するための課題研究・プレゼンテーションを実施してきた。これらを継続して実施する。

A－b 「ジモト大学」プロジェクト

1年次の生徒は全員受講。「ジモト大学」は平成29年度に設立された「もがみ地域理解プログラム運営委員会」が実施しているもので、本校の「地域理解プログラム」の趣旨に共感した最上地域政策研究所が、「地域産業を支える人材の育成・確保」の視点から施策提言し、新庄・最上地域の8市町村・県に呼びかけて実現したもの。高校生が地域課題を体験できる講座を県・各市町村が出し合って実施。平成30年度は21講座、令和元年度は32講座が開設された。これらを継続して実施する。

A－c 地域理解発展研究

2年次で履修。1年次の「地域理解プログラム」を土台に、より実際の地域社会における課題解決に近い形での探究型学習を行う。生徒が個々にテーマ設定し、外部での調査・連携を主体とすることで、地域と生徒がより密に関わる。後述の「ジモトサミット」などとも関連し、高校生を中心とした地元住民の声を総合計画に提言するなど、実社会での課題を実際に解決できる働きかけを実施していく。

A－d 研究発表実践

3年次では、1・2年次で探究してきた研究内容をもとに、自身の進路決定につなげる「専門分野における研究発表」をテーマとする（事業2年目より実施）。

A－e 地域系部活動の設置

全生徒が所属部員とする「地域連携部」を設置し、既存の部活動単位で生徒が得意分野を活かして地域で活動できる環境を整える。あわせて、地域連携のフロントランナーとして新たなテーマを切り開く、より深い探究の機会を提供するために、核となる生徒による地域系部活動「地域連携隊(仮称)」を設置する。地域の維持・活性化に貢献する活動を主体的に企画・実施する。

B ICT技術の活用

ICT技術を地域における探究活動に活用する経験を積ませることで、Society5.0に変容する地域社会の中でAIやデータの力を最大限活用し展開して、地域を牽引することのできる『人財』を育成する。

B－a 地域連携アプリの開発

地元企業と連携して地域連携活動専用のスマートフォンアプリを開発し、「ジモト大学」において県や各市町村が提供する地域連携の取組みへの参加をより簡便にすることで、地域活動の活性化を図る。また、参加後の振り返りをスマートフォンで入力可能とすることで生徒の意識向上や活動の蓄積に加え、連携する大学との間で生徒が入力記録したe-ポートフォリオを直接利用する新しい入学者選抜の研究を実施する。

B－b 情報リテラシーの醸成

ICT技術は、過疎が進む地域においても、都市圏と同等に競い合い豊かな社会を創造するための、そして技術革新や価値創造の源となる飛躍的知を発見・創造していくためのキーテクノロジーとなる。AIやデータの力を最大限活用して展開し、地域を牽引することのできる人材を育成することを目指す。タブレット等のさらなる整備を行い、探究活動を実施しながらいつでもデータを活用できる環境を整える。特に地域における探究活動の多い「地域理解発展研究（2年次）」や「地域理解プログラム（1年次）」においては、取材時に生徒がタブレットを持って調査・記録しながら活動することのできる環境を整える。

C 新しいキャリア教育

C－a アカデミックインターンシップの取組

本校がその特性を生かしながら学校独自に作成し実施している「キャリア教育実践プログラム」を見直し、「企業訪問」「企業説明会」や「医療看護系体験」等の内容を発展拡充させ「アカデミックインターンシップ」として新たに展開する。生産・科学技術で優れた実践や技能を持つ地域企業の「企業説明会」などを企画し、地域全体での『人財』の育成に繋げ、大学の先の将来の展望を見据え、地域の企業に目を向けさせる。

C－b 研究実績の進路指導への活用

連携する大正大学・東北芸術工科大学とは、単純なAO入試・推薦入試から一歩進めて「B－b 地域連携アプリの開発」で生徒自らが入力記録したe-ポートフォリオを直接活用する入学者選抜の新しい形を探る。具体的には、これらの取組みを拡大することで、従来の入試制度とは異なる高大接続の方法を探る。

D 成功のカギ「教育課程の開発」

進学を主とする学校における地域連携の教育課程モデルを編成し、地域の未来を切り開く高い志と能力を持った『人財』を育成する。

D－a 「ふるさと科目」の開設と教材開発（2年目より実施）

探究型学習に深さを与えるために、地域の情報をインプットする学校設定科目「ふるさと探究Ⅰ」（1年次）、「ふるさと探究Ⅱ」（2年次）を新たに開設する。各教科担当者が学習指導要領の科目を土台として、地域を題材とした指導を行う。

D-b 学校設定科目「Myエリア・ラーニング」(1～2単位)の開設

「ジモト大学」プロジェクト、「ユネスコ無形文化遺産新庄祭り」などの地域活動を、学校外における学修として単位認定する学校設定科目「Myエリア・ラーニング」を新たに開設し、教育課程上に位置付け、より積極的な活動に繋げる。

類型毎の趣旨に応じた取組内容

(1) ジモトサミットの実施

本校の実践を地域の各高等学校に拡大し、さらに地域住民の声も聞くことのできる場として「ジモトサミット」を開催する。成果発表会においても審査員として地元住民を招くなど、地域住民を巻き込んだ活動にしていく。平成31～令和3年度に総合振興計画を策定する市町村については総合計画や教育大綱に提言を盛り込む(8市町村はコンソーシアムの構成メンバーであり可能)。自分たちの取組が地域社会の変化に繋がる経験は高校生を大きく成長させ地域の未来を切り開く高い志と能力を持った『人財』の育成に寄与する。

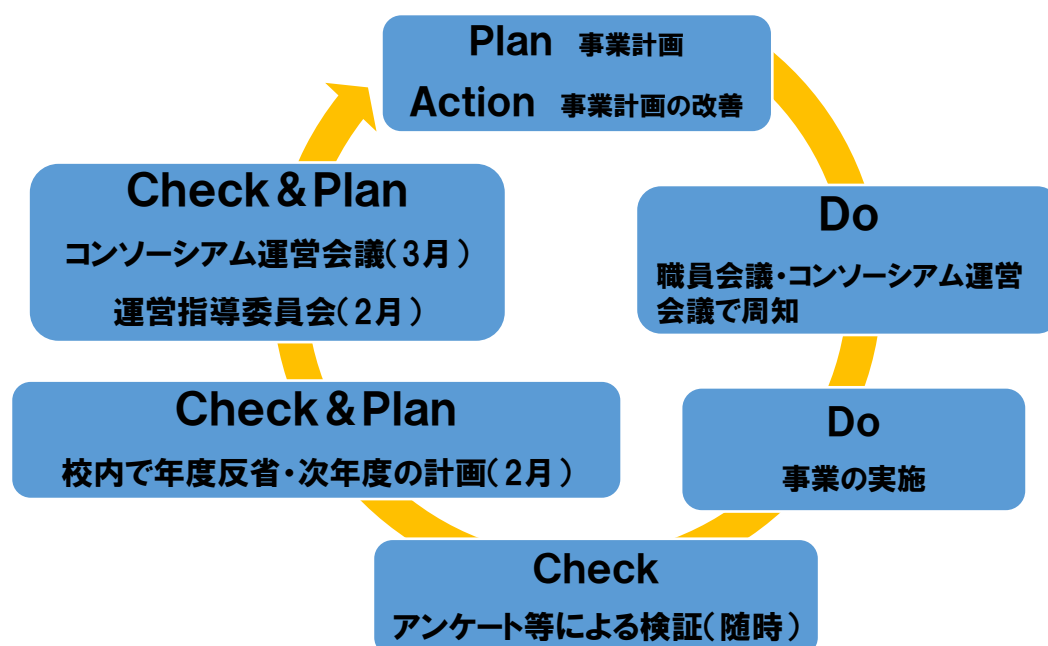
(2) 全国の地域連携校同士の交流

共通の地域課題の解決に向けた取組を行う。共同テーマで研究に取り組み、他校との活動のネットワークを構築・拡大する。

(3) 地域への研究成果の普及

コンソーシアム内に高等学校部会を設置して、地域の高等学校で研究内容を共有する。また、県内の地域連携を実施している学校と情報交換の場を設ける。

5 カリキュラム・マネジメントの推進体制



事業毎・学校単位・コンソーシアム単位のカリキュラム・マネジメントを重層的に実施。

- ・プロジェクトチーム単位のマネジメント→運営企画委員会に向けて毎月実施
- ・学校単位のマネジメント→運営指導委員会に向けて年2～3回実施
- ・コンソーシアム単位のマネジメント→年1回実施

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名	機関名	機関の代表者名
山形県教育委員会	教育長 菅間 裕晃	山形県立新庄北高等学校	校長 柿崎 則夫
山形県最上総合支庁	支庁長 須藤勇司(代表機関)	山形県立新庄南高等学校	校長 高橋 たず子
新庄市	市長 山尾 順紀	山形県立新庄神室産業高等学校	校長 佐藤 睦浩
金山町	町長 鈴木 洋	新庄東高等学校	校長 田宮 邦彦
最上町	町長 高橋 重美	東北芸術工科大学	学長 中山 ダイスケ
真室川町	町長 新田 隆治	最上教育事務所	所長 高橋 研
舟形町	町長 森 富広	一般社団法人とらいあ	理事長 本澤 昌紀
大蔵村	村長 加藤 正美	新庄商工会議所	会頭 井上 洋一
鮭川村	村長 元木 洋介	もがみ北部商工会	会長 高橋 智之
戸沢村	村長 渡部 秀勝	もがみ南部商工会	会長 佐藤 隆

(2) 将来の地域ビジョン・求める人材等の共有方法

本事業における将来の地域ビジョン・求める人材像は、そもそも「新庄・最上ジモト大学推進コンソーシアム」（平成31年3月設立予定）の母体となる「もがみ地域理解プログラム運営会議」において、地域が生き残るために、地域に生きる私たちは「どんな人材を育成しなければならないのか」をコンソーシアムを構成する機関の職員と一緒に検討したものである。このときにメンバーから出されたのが、地域の要求する次の3つの人材像である。

- ・コミュニケーション力のあるリーダーの人材育成（ビジョンを持ち課題発見解決できる人材）
- ・郷土愛を持ち主体性と程よい協調性を発揮する人材（自己肯定、ポジティブな人材）
- ・経済を支え、働く場を創れる人材（仕事をつくる、多様な生き方を創造できる人材）

これに応え、将来地域を牽引する力を持つ人材を育成するため、本校として具体的な目的を定めた。すなわち、地域の自治体（8市町村及び山形県）・企業・活動団体そして地域住民等と連携し、

①探究心と地域の課題を解決する高い能力を持った人材

②郷土に対する誇りを持ち、社会や地域とつながる意欲にあふれる人材

③Society5.0に変容する地域社会の中でA Iやデータの力を最大限活用し展開して地域を牽引していく人材

総称して、**地域の未来を切り開く高い志と能力を持った『人財』**を育成することを目的とする。

また、「学校」の改革を進めるのはもちろんであるが、学校と地域が「L I N K」し（つながり）、自治体・地域住民の側の地域力を高め、地域外への人材流出が加速化していた従来とは逆の『地域に戻る新しい人の流れ』をつくることを最終的な目的としたい。

(3) コンソーシアムにおける研究開発体制

「新庄・最上ジモト大学推進コンソーシアム」（平成31年3月設立）開設後も、母体となった「もがみ地域理解プログラム運営委員会」を残して、高校における諸事業への支援のためのプロジェクトチームを編成する。現段階では「A-a 地域理解プログラム」及び「A-b 「ジモト大学」プロジェクト」を中心とした取り組みになっているが、支援事業を随時増やしていく。（A-c、A-d、A-eをスタートに必要なに応じてチームを増やす予定）

【活動日程・活動内容】

活動日程	活動内容
平成31年3月19日	コンソーシアム設立総会(組織の立ち上げ)
令和元年5月17日	第1回運営委員会 ・委員長選出 ・ジモト大学の運営について ・部会設置 (高校部会・地域協働事業部会・サマーアイデアキャンプ部会)
令和元年7月1日	ジモト大学プログラム作成研修会（講師：牛木力氏）
令和元年12月9日	第2回運営委員会 ・ジモト大学報告 ・ジモト大学報告書について ・ジモト大学フォーラムについて ・高校部会開催
令和2年2月12日	ジモト大学フォーラム(ジモトサミットより改称) ・高校生の課題研究発表 ・高校生がファシリテートする地元住民との対話

(4) カリキュラム開発等専門家又は海外交流アドバイザーについて

①カリキュラム開発等専門家（平成31年4月より3名のカリキュラム開発専門家を委嘱する。）

役 職	氏 名	備 考
カリキュラム開発等専門家	牛木 力	島根県津和野高等学校魅力化コーディネーター 年4回来校。令和2年度から勤務先が東北芸術工科大学(山形市)に変更となり、牛木力氏から主に指導をいただくことになる。令和元年度は遠距離のため、回数が少なくなったが、令和2年度を見越しての依頼。
カリキュラム開発等専門家	浦崎 太郎	大正大学 運営指導委員を兼ねる。 年5回来校または訪問。メール、Web会議システムで随時指導をいただいている。
カリキュラム開発等専門家	岡崎 エミ	東北芸術工科大学 運営指導委員を兼ねる。 1ヶ月～2ヶ月に1回来校又は訪問。メールでは随時指導をいただいている。

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年4月26日	・浦崎太郎氏（訪問） 大正大学に訪問して、年間の事業日程について打合。
令和元年5月16日	・岡崎エミ氏（訪問） 東北芸術工科大学に訪問して年間の事業日程について打合。 併せて中山ダイスケ学長に協力依頼。
令和元年5月17日	・浦崎太郎氏・岡崎エミ氏 ジモト大学プロジェクトについて打合、指導、助言
令和元年5月28日	・浦崎太郎氏・牛木力氏 職員向けの研修会。 プロジェクトリーダーと事業内容について打合
令和元年7月1日	・牛木力氏 ジモト大学開講者に対するプログラム作成の研修 探究活動の主幹の探究推進課員と打合、指導、助言
令和元年8月26日	・浦崎太郎氏・岡崎エミ氏・牛木力氏 プロジェクトリーダーとのパワーミーティング

令和元年 9 月 30 日	・岡崎エミ氏・浦崎太郎氏・牛木力氏（Web 会議システム） 第 1 回運営指導委員会に出席
令和元年 12 月 9 日	・岡崎エミ氏 ジモト大学の総括
令和元年 12 月 23 日	・岡崎エミ氏（訪問） ジモト大学フォーラムに向けて、本校生徒 11 名にファシリテートのための研修を実施
令和 2 年 2 月 8 日	・東北芸術工科大学 コミュニティデザイン学科学生 ジモト大学フォーラムに向けて、本校生徒をはじめとする地域の高校生にファシリテートのための研修を実施
令和 2 年 2 月 12 日	・岡崎エミ氏 ジモト大学フォーラムに出席 高校生の課題発表、地元住民との対話のファシリテートの指導
令和 2 年 2 月 25 日	・岡崎エミ氏・牛木力氏 第 2 回運営指導委員会に出席

※メールや Web 会議での打合せが多いため、運営指導委員会以外は直接来校・訪問したもののみ。

（5）地域協働学習実施支援員について

現在はコンソーシアムの所属する 8 市町村の予算を出し合って「一般社団法人とらいあ」が地域協働学習実施支援員としての役割を担っているが、事業開始に伴い拡充する予定。

①地域協働学習実施支援員

役 職	氏 名	備 考
地域協働学習実施支援員	高山 恵美子	一般社団法人とらいあ副理事長 ジモト大学事務局
地域協働学習実施支援員	浅沼 道生	山形県最上総合支庁連携支援課
地域協働学習実施支援員	坂本 健太郎	山形県最上総合支庁連携支援課

②実施日程・実施内容

日程	内容
ジモト大学準備期間 (4～5 月)	高山恵美子氏 ・週 2～3 回 ジモト大学の準備・調整等
ジモト大学開講期間 開講前調整期間 (6～10 月)	高山恵美子氏 ・週 3～5 回 ジモト大学開講先との連絡調整等 ※業務として委託しているため、勤務は不定期

※浅沼道生氏・坂本健太郎氏は担当の県職員のため、企画・調整において随時連携。

(6) 運営指導委員会について

①運営指導委員

氏名	所属・職	備考
浦崎 太郎	大正大学・教授	カリキュラム開発等専門家
岡崎 エミ	東北芸術工科大学・コミュニティデザイン学科長	カリキュラム開発等専門家
浅沼 道生	最上総合支庁連携支援室・室長	コンソーシアム代表
庄司 正人	(株)山形メタル・代表取締役	地域の企業代表
澁江 学美	新庄市立新庄中学校・校長	地域の中学校代表
佐藤 睦浩	山形県立新庄神室産業高等学校・校長	地域の高校代表
菅間 裕晃	山形県教育庁高校教育課・課長	管理機関

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年9月30日	第1回指導委員会 ・各プロジェクトチームから進捗状況の説明、意見交換 ・プロジェクトチーム毎に運営指導委員と打ち合わせ
令和2年2月25日	第2回運営指導委員会 ・令和元年度の総括 ・令和2年度の事業内容検討

(7) 研究成果報告・事業成果の検証に向けた計画

①カリキュラム・マネジメントにおける検証

事業の改善をリアルタイムに行うために、事業毎・学校単位・コンソーシアム単位のカリキュラム・マネジメントを重層的に実施する。

- ア. プロジェクトチーム単位のマネジメント → 運営企画委員会に向けて毎月実施
- イ. 学校単位のマネジメント → 運営企画委員会に向けて年2～3回実施
- ウ. コンソーシアム単位のマネジメント → 年1回実施

このため、次のようなものなどを資料として活用する。

- ・個々の取組におけるアンケート、学習レポート等
生徒（ワークシート形式による自己評価やアンケート）、教員（意識変化のアンケート）
保護者・連携先教員・外部（成果発表会等におけるアンケート調査）
指標による評価（本事業における「研究開発の具体的指標」等）、成果物による評価 等
- ・運営指導委員による評価、カリキュラム開発専門家の指導、運営企画委員会における意見

- ・既存の本校独自調査…生徒による授業評価アンケート、探究活動前後の生徒アンケート
生徒・保護者の学校評価アンケート、学校評議員による評価及び学校自己評価

②三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)の高校魅力化評価システムの活用

客観的な評価・他校との比較検証を行うために交流のある三菱UFJリサーチ&コンサルティングの「高校魅力化評価システム」を利用した検証を行う。地域力の向上に向けても、先進事例を参考にしたプログラム作成の協力をいただく。

③事業報告

毎年事業報告会を実施、事業報告書を発行。また、実施内容については全国での地域連携シンポジウム等で発表しており、今後も継続して行う。

(8) 管理機関における取組について

①管理機関(コンソーシアム含む)における主体的な取組について

本事業の柱となるジモト大学プロジェクトには県及び市町村の予算が投入されており、コンソーシアムが主体となる取組である。令和2年度からはジモト大学の各講座が「Myエリア・ラーニング」として学外の学修として教育課程の中に位置づけられることから、役割はさらに重くなっていく。講座の数、受け入れ態勢、学びの質の確保を目指し、講座の勉強会、地域住民向けの発表会を含むフォーラムの開催、講座の提供主体となる外部人材の拡大等を図っていく。

②事業終了後の自走を見据えた取組について

コンソーシアムには、既に県及び市町村の予算が投入されているが、令和2年度より各市町村からの支出を現在の20万円から40万円に増額することが決定している。このことにより、地域協働学習実施支援員(一般社団法人とらいあ高山恵美子氏)と共に事業を拡大することが可能である。

カリキュラム開発等専門員、その他の地域協働学習実施専門員は事業の始まる前から支援をいただいていた方であり継続した対応が可能(コンソーシアム予算の活用も可)。

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

県や市町村、高等学校、商工会等がコンソーシアムのメンバーとなっているため、コンソーシアムの規約を通して、ジモト大学のプログラム提供者や自治体の各部署との協働が図られている。

「Myエリア・ラーニング」における協力先については、市町村のまつりの実行委員会等との連携が出てくるため、個別に調整を行っている。

の高等学校の機能強化を図る」ことが実現できると考えている。

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科

- ・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等
- ・「総合的な探究の時間」においては地域との協働による系統的な指導を確立することができた。1年次「地域理解プログラム」、2年次「地域理解発展研究」、年次を通しての「ジモト大学」「地域探究部」の活動などが、生徒の意識を変えている。探究活動においては、生徒が教員の力を借りずに主体的に外部の方とアポイントメントを取るといったことが多数出てきている。

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

- ・「総合的な探究の時間」における「地域理解プログラム」「地域理解発展研究」「ジモト大学」等の取組は、それ自体が教科横断的な性格を持っているが、令和2年度より開講する「ふるさと探究」はその色合いをさらに濃くした教科・科目となる。令和元年度は開講のための準備に充てたが、準備の段階で既に教員が自分の専門教科を様々な視点から見つめ直すという効果が見られる。

（例）英語の教員がインバウンドについて学ぶ

地歴公民と国語の教員が祭りの山車を仲立ちにしてお互いの内容を学びあう

④類型毎の趣旨に応じた取組について

- ・ジモト大学フォーラム(ジモトサミットから改称)
高校生がファシリテーターとなって地元住民と対話する機会を提供することで、地域社会の変化に直接携わることができるよう考慮している。
- ・全国の地域連携校同士の交流
連携する東北芸術工科大学ではサマーアイデアキャンプ、スーパーコミュニティハイスクール(SCH)など全国の高校生が参加する企画を手掛けている。このような場で一緒に研究する機会を得ることで、他の地域連携校と共同テーマで研究するなど、全国単位でのネットワークを意識させている。

⑤成果の普及方法・実績について

- ・毎年、年度末に研究収録を発行して県内の高校や本事業の指定校等に広く配布することで、取組内容の普及を図る。
- ・「中等教育資料(2月号)」「山形教育(9月号)」等の刊行物に執筆することで、内容の普及を図っている。
- ・県外の研修会やフォーラム等でもジモト大学を中心とした取組を紹介している。

- ・地域内の高校への普及については、コンソーシアムに高校部会を設置して、定期的に部会を開催することで普及を図っている。
- ・県外からの視察が県教委単位で2県(埼玉県・新潟県)、学校単位で10校以上あり、詳細な説明をしており、普及に繋がっている。

(3) 研究開発の実施体制について

①地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

- ・カリキュラム・マネジメントのプロジェクトチームが担当している。
- ・有志の教員で活動の深化を図る「探Qカフェ」や研修会などの実施で有効に機能している。
- ・当初、校内のアンケート等によりカリキュラム・マネジメントを進めていく予定だったが、全国サミットにおいて三菱UFJリサーチ&コンサルティングの高校魅力化評価システムの有用性に気が付き、上記プロジェクトチームを中心にこのシステムの活用を図っている。

②学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

- ・10のプロジェクトチームを中心に運用している。教頭が運営企画委員長・運営事務局長として、特定職員に業務が集中しないように随時調整を行っている。

③学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

- ・プロジェクトチーム単位で運用し、定期的に運営企画委員会を開くことでお互いに、進捗状況を確認するようにしている。また、教頭が運営企画委員長・運営事務局長として、日常から進捗状況の管理を行っている。

④カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

- ・本事業の柱となるジモト大学プロジェクトはコンソーシアムが運営するものである。令和2年度からはジモト大学の各講座が「Myエリア・ラーニング」として学外の学修として教育課程の中に位置づけられる。学校側でも振り返りに力を入れることで、学びの蓄積として校内カリキュラムに落とし込むことを目指している。このために開発したのがジモト大学Webシステムであり、e-ポートフォリオ化も可能な振り返り機能を追加するよう、システムの改善を行っている。

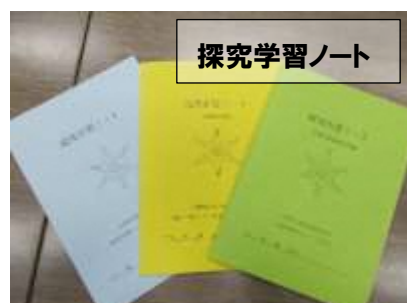
2 事業の内容

A-a 地域理解プログラム

「地域理解プログラム」は1年次の総合的な探究の時間において展開されている。前期（夏季休業まで）は探究スキルの習得を目標として、生徒たちはプレゼンテーションやKJ法、ディベートなどに取り組む。後期から本プログラムは本格始動し、「新庄市でできること」を考え、アイデアの実現に向けての方策を探究していく。平成30年度は最上総合支庁から提示された地域課題の解決策を考える学びであったが、分野による課題の難易度の差や最初に課題ありきの視点での探究活動であったために、生徒が地域のマイナス面に着目してしまっていたのではないかという課題が挙げられた。そのため、令和元年度においては、当初計画していた前年度の踏襲的な活動を見直し、「地域の可能性」に着目させる方向に転換することとし、7月に年間計画の見直しを行った。見直しのねらいとして生徒が経験する「探究サイクル」の数を増やすこともある。本校の総合的な探究の時間は探究サイクルを1年間に1度回すスタイルであったが、島根県の津和野高校や隠岐島前高校の視察において両校が生徒に探究サイクルを幾度も経験させていることがわかった。これを受けて、本校でも探究サイクルを数回経験できるカリキュラムへの変更が断行された。以下に示したものが、変更された今年度の年間計画である。

月	時数	内容
4月	2	プレゼンテーション
	2	ブレインストーミング・KJ法
5月	2	情報リテラシー 新聞記者講話 講師：山形新聞最北総支社長 斎藤 敏広氏
	1	ディベート
6月	3	ディベート
7月	1	ディベート
夏季		地域理解プログラム準備（新庄市の写真撮影）
9月	2	地域理解プログラム（研究とは 講師：東北芸術工科大学 岡崎エミ先生）
	2	地域理解プログラム（課題整理）
10月	3	地域理解プログラム（プレゼン／インタビュー）
	2	地域理解プログラム（情報収集・アイデア深化）
11月	2	地域理解プログラム（解決策検討）
12月	2	地域理解プログラム（プレゼン準備）
		2年次 課題研究／地域理解発展研究成果発表会見学
1月	3	地域理解プログラム（プレゼン修正・リハーサル）
2月		地域理解プログラム成果発表会（2／8）
	2	地域理解プログラム（レポート作成）

毎時の授業は山形県内の探究課・探究コース設置校に作成が指示されている『探究学習ノート』に沿って進められる。本校の『探究学習ノート』は総合的な探究の時間のテキスト兼ワークシートとなるもので、巻末の評価シートに記入することで生徒は毎時の活動の振り返りもできるようになっている。



【前期(4~7月)】 探究スキルの習得

①プレゼンテーション

入学式後に実施された1年次の宿泊研修において取り組んだ。生徒たちは分析の手法としてのマッピング、情報伝達の手法としてのナンバリング、ラベリングを学んだ後にグループを作り、自分たちの出身中学校の特徴や自慢をクラスメイトに伝えるプレゼンテーションを行った。

入学式翌日であり、互いのことを知らない状態での活動となったが、相手に自分のことを伝えることができ、協働作業による仲間意識の醸成もできたことで最後のプレゼンテーションは大いに盛り上がった。

②ブレインストーミング・KJ法

入学前に聞かされたり、思いこんだりしていた「新庄北高あるある」を生徒たちに列挙させ、それらを分類・整理することで新庄北高校のイメージと実態の差異を具体化させた。生徒たちがまとめてくれたKJ法を教員が見ることで、本校が校外の人々にどのように見られているのかを確認することができ、授業や生徒指導、校外へのPRを改善するうえでの情報を得ることもできた。



③情報リテラシー

情報を受信・発信するうえでの注意点を理解させることを目標に実施した。今年度は山形新聞社最北総社社長である斎藤敏広氏を招き、公正な新聞記事を書く上での留意事項を説明していただいた。数度にわたる構成を経て、新聞が各家庭に配られるという新聞製作の過程を知ること、生徒たちは情報発信をする際には情報の吟味と情報の受け手を想定しておくことの重要性を学んだ。講演後には生徒に新元号「令和」について書かれたインターネット、週刊誌、新聞記事の文章を読み比べさせ、各文章のメリット・デメリットや特徴について分析した。



④ディベート

情報収集力と分析力、論理的思考力の向上をねらいとして実施した。なお、今年度のテーマは「高齢者の自動車運転免許返納を義務化すべきである」と「外国人労働者を受け入れるべきである」とした。昨年度は4時間での授業展開としたが、生徒が収集した情報を整理し、論理化する時間が不十分であったことから、今年度は5時間の構成となっている。1時間目はオリエンテーションとしてディベートを行う目的とその流れについての説明とテーマ発表を行った。2時間目では事前に収集した情報を分析・整理することで立論を作り、生徒たちは立論のみの簡易ディベートを経験した。3時間目では反駁のみの簡易ディベート、4時間目に立論と反駁の修正を行わせることで論理の精緻化をはかった。5時間目でテーマごとにディベート決定戦を行わせたが、生徒たちは自分たちの意見を述べることに終始し、相手の意見に対する反論を行うことができていなかった。このことで相手の意見をよく聞き、不明瞭な点や矛盾点に気づき、指摘するという「質問力」不足が浮き彫りとなり、今後の学習活動において特に向上させる必要がある能力となることがわかった。



【後期】地域理解プログラム

前述した通り、今年度は生徒たちに「地域の可能性」に着目させることをねらいとして「新庄市でできること」を探究していく学習活動に軌道修正した。これはカリキュラム開発専門家である東北芸術工科大学の岡崎エミ先生と本校探究推進課長の談話の中で組み立てられていったアイデアである。主な修正のポイントは次の3点である。

①探究サイクルを反復経験させる

地域協働の先進校の実践例を見ると、「課題設定→情報の収集→整理分析→まとめ表現」といった探究サイクルを1年間のカリキュラムの中で何度も生徒に経験させていた。これと比較して、本校のカリキュラムは1年間で探究サイクルを1回転させるだけであり、先進校と比較した場合、生徒の探究スキルを十分に伸ばさせることができていない。そこで、1学期を“ファースト・サイクル”、2学期前半を「セカンド・サイクル」、2学期後半から3学期を「サード・サイクル」とし、探究サイクルを1年次で3回経験させることとした。

ファースト・サイクルは教員主導のもと、生徒に「課題設定→情報の収集→整理分析→まとめ表現」の探究サイクルを経験させる。2学期前半では生徒が自らテーマを設定し、探究サイクルを回す。それに対する評価を受けて、セカンド・サイクルの内容を振り返る。2学期後半からはセカンド・サイクルの評価を基にして、より深い考察とアイデアの実現に向けたサード・サイクルの学びを展開する。

②地域のマイナス面ではなく、プラス面に目を向けさせる。

新庄・最上地域の課題は非常に多い。高齢化・少子化・財政難をはじめとして多岐にわたる。確かにこれらは解決しなければならない問題であるが、多種多様な地域課題を突き付けられ、大人でも解決できないこれらの課題の解決を求められることは高校生にとってはストレスである。課題を解決しなければならないという重圧、試行錯誤して考えだした解決策に対する大人の厳しい指摘は生徒の探究心を潰えさせてしまう危険があると考えた。

そこで、今年度は「新庄市でできること」を自由に発想させた。課題解決がゴールではなく、今日の前にあるものをより良くする方法を考えることがゴールである。これによって生徒は気楽に探究活動に取り組むことができるようになると考えた。

③頼れる大人がいることに気付かせる

昨年度、自治体や団体の方々が課題提供者と相談者を兼ねる面があり、地域の大人の意見を取り入れることで、成果発表会では具体的で効果の見込める提案ができていた。高校生にできることには限界があり、大抵の生徒の探究はそこで終了してしまうのだが、大人の力を借りることで探究を進められることもある。

ジモト大学においても生徒たちは地域の大人とつながる機会を得る。これに加えて、地域の人々に地域理解プログラムに参加してもらい、生徒たちが自分たちのアイデア実現に協力してくれる“探究パートナーとしての大人”を見つけ出せるようにする。

以下は、ここまで述べたねらいに基づき、実践した取り組みを紹介する。

①夏季休業

生徒を出席番号でグループ分けし、全部で40グループを作らせた。グループごとに「テーマ」を設定させ、夏季休業中に新庄市内で気になる場所の写真を撮影しておくことを指示し、夏季休業明けの地域理解プログラムの最初の授業でグループ内共有を行うことを伝えた。

②研究とは

本事業のカリキュラム開発専門家である東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科学科長の岡崎エミ先生による講演と夏季休業中に撮影した写真データのグループ内共有を行なった。

岡崎先生からは学力の定義が変わり、知識量で優劣がつく時代ではなくなっていること、20歳ごろまでに「学び方」を学ぶ経験を重ねておかないと変化の続く未来社会では生きていけなくなることが生徒に伝えられた。

後半の写真共有では「新庄市には赤い看板が多い」、「新旬屋（ラーメン屋）の金色のトイレ」などの教員が知らない、気づくことができない新庄市内の魅力の情報交換に生徒たちは意欲的に取り組んでいた。

③課題整理

今年度購入したパーティションホワイトボードを利用して、生徒たちはグループ内で共有した写真データを分類・整理する作業に取り組んだ。生徒たちの対話が非常に活発となったが、これはパーティションホワイトボードの導入によって、付箋に書いた「できること」・「わかったこと」をKJ法の手法で分類・整理し、ラベリングの手法で「何ができるのか」・「何がわかったのか」を明確にすることで、焦点化した対話ができることが要因であると考えている。



④プレゼン/インタビュー

コンソーシアムに協力を依頼し、地域の官公庁・企業の方 31 名を講師として迎え、生徒と地域の大人による対話を実施した。生徒たちはここまで考えてきた「新庄市でやってみたいこと」・「新庄市でできること」を提案し、大人は生徒たちの意見に対するアドバイスと自治体や企業としての業務、地域人として取り組んでいることを伝えた。対話は名刺交換・自己紹介 2 分、講師が自分の仕事について説明 4 分、生徒が自分たちのプランを説明 4 分、対話 5 分の 15 分 1 セットを 6 回行う形式をとった。生徒のプランを実現するための協力を提案してくれた地域の方もおり、生徒たちは自分たちのアイディアに確かな“手ごたえ”と“支援者”を得ることができたと言える。



⑤情報収集・アイデア深化

前時における地域の方との対話で得られた情報に加え、最上総合支庁が発行している冊子『job っかもがみ』を活用して、地域の大人たちが取り組んでいることから自分たちのプラン実現に活かせるような情報を増やす活動である。生徒は多様な観点から自分たちのプランを見つめることで、プランの修正と発展につなげていった。修正したプランによって新庄・最上地域に与える影響・変化についても考察させたが、この段階で生徒は自分たちの探究活動が地域発展に寄与する可能性を実感し始め、グループ内での対話が一層活発なものとなっていった。



また、グループ外の意見も集めるべく、自分たちのプランをまとめた用紙を教室前の廊下に掲示

し、用紙を見た人が付箋にコメントを書き込めるようにした。次回の「情報整理」において、グループ外の第三者的意見から活用できそうなものを取り入れさせるためである。

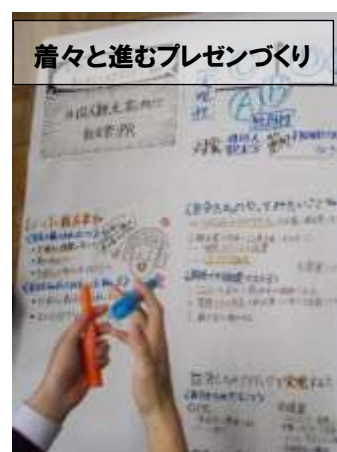
⑥情報整理

プレゼンテーションに向けての準備である。一次発表会のプレゼンテーションは6枚の紙芝居による紙芝居プレゼンテーション（以下KP法）で行わせ、その構成は以下の通りである。

- 1枚目：グループ番号・グループメンバーの名前・発表タイトル
- 2枚目：写真を撮ってわかったこと、自分たちのやりたいこと「Ver.1」を記入させる。
- 3枚目：大人の方々からいただいたアドバイスをまとめる。『job つか最上』から得た、地元企業で行っている効果的な取り組みをキーワードでまとめる。
- 4枚目：自分たちのやりたいことをマトリクス（縦軸：独自性、横軸：実現性）でまとめ、よりよいプランにするために絞り込んだ対象や範囲を提示する。
- 5枚目：自分たちのやりたいこと「Ver.2」を記入させ、「ver.1」と比較してどのように改善したのかを口頭で説明できるようにする。また、プランを実行することで期待できる効果とその理由も説明させる。
- 6枚目：プランを実現するために、自分たちが着手すべきこと、地域の大人に協力してほしいこと、必要となる条件をまとめる。

生徒には作成用ワークシートに沿って作業を進めさせた。マーカーを使っての紙芝居作成の様子を見ると、協調したい部分の文字の色・太さ、補足資料として図や写真を用いるなどグループ毎の創意工夫が見られた。

特筆すべきは自分たちのプランをInstagramにアップし、世界中から意見を集めようとしたグループが現れたことである。なお、Instagramを見た新庄市商工観光課の方が興味を持ち、生徒に話を聞きたいという連絡が学校に寄せられている。



⑦プレゼンテーション

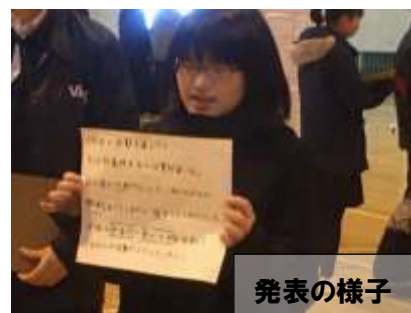
作成したプレゼンテーションをグループ同士で相互評価させ、コメントを参考にしてプレゼンテーションを修正、最終リハーサルに取り組みさせた。成果発表会を目前にした段階になって、生徒から「もっと調べたい」、「まだ満足できない」、「また一緒に研究しようよ。」という声が聞こえてきたことに教職員は驚かされた。中には次年度の課題研究の見通しを立てている生徒もおり、主体的な姿勢で探究活動を進めていたことを実感することができた。

12月に2年次の発表を見学した経験から、どのグループも質の高いリハーサルができており、一度リハーサルした後に改善点をじっくり討議する様子も見られた。



⑧ 成果発表会

2月8日(土)に本校体育館において実施した。発表テーマ数は40。生徒は発表5分、質疑応答3分、リフレクションシート記入2分の合計10分のプレゼンテーションに取り組んだが、今年度の特徴としてスマートフォンを活用し、自分たちが撮影した写真を紹介したり、インスタグラムに掲載した画像を紹介したりするグループが見受けられた点がある。このような情報通信機器やSNSの活用は今後も増えていくことが予想される。成果発表会には教育関係者、保護者、地域団体関係者など多くの来場者があった。2年次の成果発表会よりも来場数が多い状況は、新庄・最上地域に地域活性化に関心を持っている人々が多いことを示していると考えられる。



発表の様子



【令和元年度 地域理解プログラム テーマ】

1	甘さが呼ぶ幸せを求めて	21	スーパー紹介
2	～そうだ！神社へ行こう～	22	最上公園を活用して、子ども向けフリーマーケットをしよう!!
3	しあわせのふり～Wi-Fi	23	新庄一詳しいラーメンマップをつくる!
4	昔からある店と最近の店の違い	24	発見!新庄の輝き
5	キラキラ ラーメンマップ	25	インターネットを用いてなくさないグルメスタンプラリー
6	家族みんなでたねてけろ	26	世界一効率の良いラーメン情報の集め方
7	拉麺道	27	新庄のラーメン食べ比べ
8	制服改革	28	とりもつをここから～作るか 食べるか 恋するか～
9	新庄の自然 with かむてん	29	フォトコンテストで新庄に活気を!!
10	新庄の活気を取り戻す	30	映えスポット探索ツアー
11	外国人観光客に向けた新庄祭りPR	31	かむてんを通して新庄市をPR
12	映えるラーメン	32	新庄の自然をもっと多くの人に知ってもらおう!
13	新庄市を盛り上げよう	33	寺を楽しいイメージに!
14	新庄のちょっとした良い風景	34	新庄市クロスワード with 100円商店街
15	新庄市ラーメンbooklet～ラーメン王2020	35	Do you love Kamuten?
16	伝承野菜を広めたい!	36	めざせ1万回!10代に告ぐ本気の新庄PR動画
17	一度行ったらハマる!!美味しさの沼	37	おいしいWi-Fi
18	新庄市にあるラーメン屋についてのマップを作ろう!	38	ガソリンスタンドを利用して地域を発展させよう
19	新庄エンジョイマップを作ろう!	39	ラーメンフェス in Shinjo
20	地元密着型!!ラーメンマップを作ろう!In新庄	40	娯楽施設の設置

⑨レポート作成

探究活動の成果をレポートしてまとめさせている。このレポートは次年度の地域理解プログラムにおいて1年次生がテーマ設定をする際の参考資料となる他、2年次探究コースの生徒が地域理解発展研究のテーマ設定、先行研究調査などにおいて活用することができる。本レポートの内容を研究材料の一つとすることはもちろん、継続研究をすることも可能である。

今年度は今後の研究につながるレポートとすべく、昨年度から以下のような変更を加えている。

昨年度のレポート（1枚）	令和元年度のレポート（2枚）
<p>【項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タイトル ・考えたい課題 ・訪問先 ・（訪問先の）業務概要 ・（訪問先の）効果的な取り組み ・提案する解決策 ・期待できる効果・実現可能性 ・自分たちの解決策を実現するために ・研究を深めるために（リフレクションシートより） 	<p>【1枚目の項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ ・グループメンバー ・1 はじめに <ul style="list-style-type: none"> （1）テーマ設定の背景 （2）写真を撮ってわかったこと （3）やってみたいこと Ver. 1 ・2 調査・分析 <ul style="list-style-type: none"> （1）大人の方とのトークフォークダンス （2）地域企業に関する情報収集 （3）出てきたアイディア分析・焦点化 （4）やってみたいこと Ver. 2 <p style="text-align: right;">（期待できる効果）</p> <p>【2枚目の項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3 考察 <ul style="list-style-type: none"> （1）これまでわかった点・うまくいった点 （2）まだわからない点・うまくいかなかった点 （3）次にやるべきこと・今後の研究の方向性 （4）後輩へのメッセージ ・4 謝辞 <ul style="list-style-type: none"> （1）お世話になった外部の方々へ （2）頂いた名刺の連絡先（企業名・お名前）

例年であれば、期限まで提出できないグループが多く、生徒に提出を促さなければならなかったが、今年度の提出状況は非常に良く、2月29日の締め切りまで提出できたグループは40グループ中38グループであった。提出できなかったグループからは「完成していて家に置いてきてしまった。」「2枚のうち1枚を忘れてきてしまった。」という申告もあり、ほぼ完璧な提出であったと言える。この結果には前向きな姿勢で探究活動ができたことが影響しているのではないだろうか。

【地域理解プログラムのレポート】

グループ番号 16
テーマ

伝承野菜を売りたい

グループメンバー

1. はじめに

1.1 テーマ設定の背景

周りの人たちがみんな
はいチーズ行きたいと思っていた

1.2 背景を調べてわかったこと

- 長期保存ができること
- 生産量が少ないこと
- 色・形が独特なこと

1.3 調べてわかったこと Ver.1

伝承野菜を原料とした料理を
作り、他人に食べてもらい
その結果をもとに、がスカーを
作成・掲示する。

2. 調査・分析

1.1 大人の方とのトークショーの感想

農家の方や産直、販売やネット販売
に関して、SNSを活用して、販路
を広げる。

1.2 地域産業に関する情報収集

- 野菜(小豆)の伝承野菜を
産出した 料理を提供。

1.3 調べてきたメディア分析・商品の
特徴 (小豆) 産直 販売方法
+ SNS活用 特徴 販売方法
+ SNS活用 伝 中
+ SNS活用 高 高
+ SNS活用 産 高

1.4 調べてきたこと Ver.2 (調査できる結果)

高級品 → SNSで情報発信
① 利用者が多く各農家が産出する。
② 特産品 → SNS → 内訳調査
③ 学校イベントや観光イベントで販売する。
④ SNS活用による販路拡大

期待できる効果

1. 知名度アップ
2. SNSを活用して、販路の拡大
3. 消費者のup

3. 考案

1.1 これまでわかってきた、うまくいかなかった点

- 産りが注目しないことを調べることができた。
- 大人の協力がもてる必要だという点。

1.2 まだ知らない点・うまくいかなかった点

- 時間配分がうまくいかなかった(準備)
- テーマについてもっと具体的に答えることができた。
伝承野菜のための案なのが、地域活性化のために取り組むということ。

1.3 取り組むこと・今後の研究の方向性

- 農家の方にインタビュー
- 小・中学校に配布する予定の準備
- 「親の伝承野菜」を買いたいと思いたという意見があったから、それを参考に、伝承野菜を買ってもらうにはどうしたらいいかを考える。
- 宣伝方法の見直し

1.4 情報へのメッセージ

自分たちがなぜこの提案をしたのかを明確にするために、色んな質問やアンケートを準備して、それを根拠として提示することが大切。
大人の方の意見やアドバイスを、取り組みながらよく考えているから、しっかりと聞いていくこと。

4. 謝辞

1.1 お世話になった関係の方々へ

貴重なご意見・アドバイスを下さり
ありがとうございました。大変勉強
になりました。

1.2 調べた資料の提供先 (企業名・団体名)

- 有限会社 ワールドアイ
- 山形県農産物総合支援
産業経済部 農業振興課
- 地域産業経済資源
- 株式会社 新法砂石工業所
- 株式会社 森環境技術研究所

A-b 「ジモト大学」プロジェクト

最上8市町村によって構成されるコンソーシアムが主体となって、当該地域の全ての高校生を対象とした体験型の学びを提供するプログラムである。高校在学中に1度は参加できるように受け入れ枠を拡大し、一学年分生徒約700人の参加を目標としている。平成30年度は21講座が開講され、参加した高校生は418人となった。今年度は32講座が開講され、参加した高校生は述べ509名となっている。今年度開講された講座は以下のものである。

	講座名	主催団体
1	雇われない生き方を学ぶ	Kitokito マルシェ運営委員会
2	YouTuber の作り方	株式会社 JPD
3	鮎釣り甲子園～最上小国川の文化に触れる～	最上小国川鮎釣り甲子園大会実行委員会
4	自分の「好き」で、なりたい自分を叶えよう	～MOGAMI なりわひ～芽から樹
5	高校生対象医療福祉座談会	最上総合支庁
6	“ジモト” de “シゴト” 「やりたい！」が「やれる！」につながる。	金山町
7	働くオトナの背中から見える未来のジブン	舟形町
8	Let's 盆☆ダンス～参加者皆が振付師～	公益社団法人新庄青年会議所
9	高校生対象医療現場見学会	最上総合支庁
10	しごとトーク～理工系学部大学に進んだその先には…～	最上総合支庁
11	車いす YouTuber と新庄まつりをレポートしよう！	わたしのくらしプロジェクト
12	Next Action～一步踏み出す、今日がその日～	Agasuke House
13	あなたが考える「豊かな」社会はどんな社会？	認定 NPO 法人 IVY
14	あなたの行動が災害から地域を守る「防災ワークショップ」	最上総合支庁
15	SUMMER IDEA CAMP 2019	東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科
16	やまがたイノベーションキャンプ	最上総合支庁
17	いつもお蕎麦に戸沢村	戸沢村
18	商店街のテーマソングを作ろう！	一般社団法人最上のくらし舎
19	しごとトーク～若手女性従業員のリアルなお話～	最上総合支庁
20	ピーナッツの商品企画で将来の自分をゲットしよう！	新庄信用金庫
21	稼げる農業～Ohkura Style～	大蔵村
22	私が描く HAPPY LIFE & WEDDING	新庄市
23	今の真室川を探求しよう！#insta まち歩き in 真室川	真室川町
24	㊦みとみつける ㊦うそのん ㊦れから	鮭川村
25	人を知ろう 地域を知ろう 大正大学ジモト塾	最上町
26	雪を売ろう！雪国で稼ごう！	新庄市雪の里情報館雪調の会「講座部会」
27	ふるさとをまもり未来をつくる 土木技術者たちのはなし	最上総合支庁
28	「道の駅」の楽しみ方を研究員と一緒に考えよう！	最上地域政策研究所

29	ミライの真室川を造ろう！SIMULATION 真室川 2030	真室川町
30	マイプロジェクト・スタートアップキャンプ	一般社団法人とらいあ
31	新鮮なアイデアで最上を元気に！	最上地区青少年育成連絡協議会
32	「持続可能な社会を考える」地域活動セミナー	最上教育事務所

今年度より「ジモト大学アプリ」が運用開始され、生徒たちはスマートフォンにアプリを取り込むことで、ジモト大学への登録・参加申請・キャンセルの手続きが容易に行えるようになった。現在は振り返



りの内容をe-ポートフォリオとして活用できるようシステムを改良している。(詳細は後段で。)

ジモト大学における学びは1年次の地域理解プログラム、2年次探究コースの地域理解発展研究の研究題材ともなった他、ジモト大学に参加することで自分の探究テーマの「相談相手」を見つけてくる生徒も多く、校内外の学びが相互補完によって生徒の成長を一層促す効果をもたらしている。

1年次生徒を参加対象としているが、2年次の生徒からも“リピーター”として参加を希望する生徒が現れたことは本実践の大きな成果であるにとらえている。まだまだ数は多くないものの、進路情報の収集や総合的な探究の学習の時間の研究実践の場としてジモト大学を活用してくれる生徒が増えることに期待したい。

2月12日(水)には新庄市民プラザ大ホールにて「ジモト大学フォーラム」が開催された。昨年度に実施した「最上ミライ会議」の内容を刷新した企画であるが、地域の高校生による地域学習の実践発表と高校生がファシリテーターとなって地域の大人と高校生の対話を進めていくという点に特徴がある。実践発表では地域探究部の生徒が「戸沢村角川地区を元気にするプロジェクト」、探究コース2年次の生徒が「新庄駅は商業拠点となり得るか」のテーマで発表を行った。また、フォーラムにおける高校生ファシリテーター養成のために東北芸術工科大学の岡崎エミ准教授とコミュニケーションデザイン学科の学生の指導の下、12月23日と2月8日にファシリテーター研修が実施されている。新庄北高校の生徒は約10名が二度にわたる研修に参加し、当日のファシリテーションを主導した。自分たちの地域学習に対する地域の大人の方の称賛、ファシリテーション運営の成功により、参加した生徒は充実感と達成感を得ることができたようである。



A-c 地域理解発展研究

地域理解発展研究は総合的な学習の時間として本校探究コース 2 年次で履修する。単位数は一般コースよりも 1 単位多い 2 単位となっており、週に 2 回実施されている。その内容は 4 月から 12 月までの間に 1 年次で取り組んだ地域理解プログラムの研究成果をベースとして地域課題解決策を考察していく学びとなっている。生徒たちは春季休業の時点からテーマ設定を進め、4 月からはテーマに基づいた先行研究調査に着手する。以下に示すものが今年度の計画である。

月	時数	内容
3 月		地域理解発展研究オリエンテーション・グループ分け
4 月	3	先行研究調査 I
	2	フィールドワーク I 計画・質問づくり・アポイントメント
5 月	2	フィールドワーク I (新庄市内・近隣施設)
	1	研究テーマ再考
	2	先行研究調査 II
6 月	2	調査結果分析・仮説立案
	1	発表準備
	1	リハーサル
	1	地域理解発展研究一次発表会 (K P 法)
	3	仮説再考・検証方法立案
7 月	2	研究設計書作成
	1	研究設計書相互評価
	1	研究設計書再考・完成 夏季休業中に検証活動
8 月	2	検証結果分析
9 月	2	検証結果分析
	1	追加検証計画
	2	追加検証・フィールドワーク II
10 月	3	追加検証分析・問題解決策立案
	2	発表準備
	1	リハーサル
	2	地域理解発展研究中間発表会
	2	フィールドワーク III (外部へのプレゼン)
	1	問題解決策再考
11 月	2	問題解決策再考
	1	発表内容修正・論文執筆
12 月	3	発表準備

	1	リハーサル
		地域理解発展研究成果発表会
	1	論文執筆

①地域理解発展研究オリエンテーション・グループ分け

春季休業中の講習の時間に実施した。生徒に地域に関連する興味・関心のあるワードを紙に書かせ、自分の興味・関心と近い仲間とグループをつくらせ対話させた。これを数回繰り返して12月まで研究をともにしていくことができる仲間を探させ、9つの研究グループを結成させた。

②先行研究調査

先行研究調査は設定したテーマについて現在までどのような研究がなされているのかを確認し、新たな研究の切り口を見つけることを目標としている。また、先行研究の有無によって、自分たちが考えたテーマで研究を進めることができるのかどうかも見えてくるため、テーマ再考の機会ともなる。生徒たちは図書館の文献やインターネットによる論文検索を主として先行研究の有無及びその内容について調査を進めた。



③フィールドワークⅠ計画・質問づくり・アポイントメント

文献やインターネット上の情報が間違いのない情報なのか、新庄・最上地域にも当てはまる事例であるのかを実際に自分の目と耳で調査する活動である。本校生徒の特長として質問が得意でないという点がある。この欠点を補うべく、2年次で使用する『探究学習ノートⅡ』には「質問づくり」のページを設け、相手から情報を引き出すことができる質問技術を学ぶ段階から始めた。

生徒たちは情報を獲得できそうな施設や人材を『新庄市報』や関係機関のホームページで検索し、フィールドワークの対象に電話でアポイントメントをとった。10連休の時期と重なり、休業日である施設や店もあり、予定した日に訪問できず、授業時間ではなく放課後に訪問することになったグループもあったが、どのグループも校外での情報収集に取り組むことができた。

④フィールドワークⅠ(新庄市内・近隣施設)

新庄市役所や新庄市観光協会への訪問取材、新庄駅前でのインタビューなどグループそれぞれで活動に取り組んだ。駅前のタクシー乗り場で運転手に質問した生徒は「新庄には何もない」と強い口調で言われていたが、同様のことを述べる新庄市民が多いという事実が見えてくるという成果があった。新庄市民の特徴として、市の衰退を自虐的に楽しんでいる点があるということは、生徒にとって地域活性化策を考える上での大きなヒントとなったようである。



⑤研究テーマ再考

先行研究調査とフィールドワークⅠを通し、設定した研究テーマで探究活動が可能かどうかを検証した。「移住してくる人々は何を求めて移住してくるのか」をテーマにしていたが、フィールドワークで駅の中を見て回ることで「新庄駅の商業拠点化」という方向に転換したグループ、市役所への訪問取材から「ふるさと納税」に興味・関心を持ち、テーマを変更したグループなどがあり、実際に生徒を校外に出したことはより「地域的」で「考察可能」な研究テーマへの軌道修正を促す効果を生んだと言える。

⑥先行研究調査Ⅱ

軌道修正した研究テーマで考察が可能かどうかを再度確認するための活動である。初めのテーマよりも「地域的」で「考察可能」な研究テーマとなっているため、研究の情報を得るために市内のどの機関・施設に向かえばよいのか、どの文献資料を入手すべきかが明確となり、生徒は今後の研究活動の見通しも具体化することができたようである。

⑦調査結果分析・仮説立案

先行研究調査Ⅱまでの段階で入手した情報の整理・分析と分析結果から考えられる「仮説」を構築した。1年次で習得したナンバリング、ラベリングの手法でデータを分析し、導き出される仮説を論理的に説明する主張づくりを進めた。

⑧発表準備～リハーサル～地域理解発展研究一次発表会(KP法)

テーマとテーマに対する仮説を紹介する一次発表会に向けての準備である。この作業も1年次に経験しているので作業自体はスムーズに進行したが、テーマから仮説までの流れを紙芝居で表現する中で自分たちの主張の矛盾点や説明できない部分に気づく生徒もいた。そうしたグループには一次発表会で聴衆に問いかけることによって手掛かりを得るように指示している。

⑨仮説再考～検証方法立案

一次発表会におけるアドバイスを受けて、仮説が妥当かどうかを検証した。続いて、各グループ

に再設定した仮説を立証するために夏季休業中に実施する検証方法を考えさせた。生徒は以下の検証方法を示している。

- ・アンケート
- ・インタビュー
- ・フィールドワーク
- ・実験
- ・ロールプレイ
- ・文献調査
- ・研究室訪問

⑩研究設計書作成～研究設計書相互評価～研究設計書再考・完成

テーマ設定から仮説を立証するための検証方法の紹介までをまとめた「研究設計書」を作成させた。設計書は研究の骨子となるものであり、夏季休業中の検証とその分析活動がブレないようにするための指針でもある。各グループから提出された設計書は探究推進課教員が複数で確認し、生徒たちと対話することで補足・修正点を見つけ出し、探究活動の確実な基盤を作らせた。

⑪検証結果分析～追加検証計画～追加検証・フィールドワークII

夏季休業中に行った検証内容を分析し、新たに検証が必要かどうか、さらに必要となる情報はなにかなどを確認させたうえで、再度の検証とフィールドワークに取り組みさせた。

多くのグループがアンケートによる検証方法を用いていたが、質問事項や対象に不備があったことで偏ったデータしか集まらなかった事例もいくつかあり、複数の調査方法や観点から検証をし直させた。中には新庄市役所の方から本校生徒用に資料をつくっていただいたグループ、来校して下さった地域の方に助言をいただけたグループもあり、地域が本校の教育活動に理解を示していることを実感できた。

⑫追加検証分析・問題解決策立案

追加検証とフィールドワークIIで得た新たな情報を整理・分析し、仮説が成立するか否かを立証したうえで地域課題の解決策を立案する活動である。仮説の成立、不成立については説明できるものの、その結果から高校生として何ができるのかという解決策づくりに苦勞するグループが多かった。こうした苦勞を支えた教材が「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の経費よって購入することができたパーティションホワイトボードである。ホワイトボードにテーマから仮説、それを裏付ける情報とその分析までの流れを記入することで生徒たちはグループ内で思考を共有し、明確な観点で議論しながら解決策を作り出していた。

⑬発表準備～リハーサル～地域理解発展研究中間発表会

中間発表会は一次発表会とは異なり、ポスターセッションの形式をとる。A0用紙にプレゼンテーションソフトで作成したスライドをA4用紙に印刷して貼りつけるというものである。枚数は10枚であり、次のような構成になっている。

- スライド1 テーマとテーマ設定の背景
- スライド2 先行研究調査の概要①
- スライド3 先行研究調査の概要②と仮説
- スライド4 検証方法①
- スライド5 検証結果①
- スライド6 検証方法②
- スライド7 検証結果②
- スライド8 考察
- スライド9 解決策と効果
- スライド10 実現のための条件と参考文献



中間発表会に向けての準備

昨年度も同様の作業を行ったが、今年度の作業は非常にスムーズに進められていった。要因としてスライド1～4は一次発表会で作成した紙芝居を活用することで容易に作成することができること、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の経費によってプリンタインクを豊富に準備することができ、例年発生していたインク切れによる作業の停滞がなかったことである。作業時間が短かったことでリハーサルの時間も確保でき、生徒の発表スキル向上もはかることができた。

中間発表会は本校体育館で行われたが、パーティションホワイトボードが購入できたことで準備の負担も大幅に軽減された。中間発表会の段階で完成度の高い研究であった「“出汁”を利用しておいしく減塩できるか」、「新庄市はふるさと納税で税収を増やせるか」の2研究を12月に開催される山形県探究型学習課題研究発表会に参加させることとした。

⑭フィールドワークⅢ(外部へのプレゼン)

中間発表会は校内の人間を対象とした発表であったため、地域の方からの評価も得ることをねらいとしてフィールドワークⅢとして地域の方へのプレゼンテーションを実施した。協力いただいた方々と生徒の研究テーマ一覧を以下に紹介する。



地域の方に対するプレゼン

研究テーマ	プレゼン相手
“出汁”を利用しておいしく減塩することは可能か	宇野栄養士（新庄北高定時制栄養士）
今の子どもたちは郷土料理が好きなのか？ ～理想の郷土料理を作れ！～	「療食」の調理員の方々
自己肯定感ややる気は地域に関わりがあるのか	笹原 啓一さん（元中学校校長）
高校と地域活性化～最上校から考える～	牛木 力さん （島根県津和野高校魅力化コーディネーター） ※Web 会議アプリを利用

奥羽新幹線は実現すべきか	遠藤 晃一さん（最上総合支庁）
娯楽施設をつくることは人口増加につながるか	フィルムコミッション
新庄市はふるさと納税で税収を増やせるか	新庄市総合政策課
新庄駅は商業拠点となりうるか	新庄市商工観光課
様々な宣伝方法を利用して（仮）新庄市立看護専門学校への入学希望者は増やせるのか	茅野 博さん（みどり印刷社長）

⑮問題解決策再考

生徒たちは中間発表会における評価シートとコメント、地域の方々からのアドバイスを参考にし、より効果的かつ具体的な問題解決策を考えた。試行錯誤を続ける中で、子どもたちに受け入れられる郷土料理を考案していたグループと出汁と減塩について探究していたグループが実際の「成果物」として郷土料理と味噌汁を作って披露するという結論に達した。「成果物」を作るというのはこれまでの本校の総合的な学習の時間では見られなかった活動であり、探究推進課として両グループの動きを見守ってみることとした。

⑯発表内容修正・論文執筆～発表準備～リハーサル

成果発表会に向けてのプレゼンづくりと探究活動のまとめとなる論文作成を並行して行わせた。プレゼンの内容と論文の内容に齟齬が生じないように、授業の中ではグループ内で情報交換を密にさせることに留意した。2回行ったプレゼンテーションとその評価は



生徒の考察を深化させ、作り直されたスライドはどのグループもより精緻な見解が述べられていた。

なお、発表準備を行っている中で、「奥羽新幹線は実現すべきか」のグループが山形新幹線新庄延伸 20 周年記念シンポジウムで研究成果を発表する機会を得ている。30 枚を超えるスライドを作成し、JR 各社のキロ毎の平均営業利益を算出。それを奥羽新幹線の営業キロ数にかけ合わせることで奥羽新幹線が利益を上げるための年数を試算したことで注目を浴びた。地域を題材とした探究活動が地域に注目されていることを示すとともに、生徒たちの探究活動が地域の大人にとって有益な情報・知識を提供するものであることを示した出来事であった。

⑰地域理解発展研究成果発表会

1 年次生および保護者・学校関係者にも公開する形で実施した。発表時間 8 分・質疑応答 2 分・準備 2 分の 12 分で構成し、一般コースの課題研究 テーマ、探究コースの地域理解発展研究 9 テーマの研究を発表させた。注目すべきは前述した「成果物」を披露した探究コースの生徒たちの発表で

あり、両グループは多くの観衆を集めていた。一般コースの方でも補足資料や写真を提示するグループがあり、それぞれの探究活動の魅力を伝える工夫が見られた発表会となった。なお、発表に対する評価はルーブリック評価を用いている。



【成果発表会ルーブリック】

項目	発表内容			発表の様子	
	テーマ～仮説	仮説～検証結果	検証結果～考察・まとめ	スライド（用紙）	発表態度
S	「テーマ設定」から「先行研究」、「仮説」へのつながりが十分に伝わる。	「仮説」に対して「検証方法」が適切に設定されており、「検証結果」もよくまとめられている。	「検証結果」に対する「考察」が明確であり、根拠も説得力がある。まとめも研究を通して明らかになった事が明確である。	用紙が見やすく、発表も理解しやすい。さらにレイアウトにひと工夫ある。	「声の大きさ」、「話す速さ」、「目線の送り方」の3つが全てできており、観衆との対話を心がけている。
A	「テーマ設定」から「先行研究」、「仮説」へのつながりのうち、不十分だと感じるものが 1つある。	「仮説」に対して「検証方法」は適切に設定されているが、「検証結果」のまとめ方が効果的ではない。	「検証結果」に対する「考察」は示されているが、根拠が不十分である。まとめは研究を通して明らかになった事が明確である。	用紙が見やすく、発表も理解しやすい。	「声の大きさ」、「話す速さ」、「目線の送り方」の3つが全てできている。
B	「テーマ設定」から「先行研究」、「仮説」へのつながりのうち、不十分だと感じるものが 2つある。	「仮説」に対して「検証方法」は設定されているが、「検証結果」のまとめ方が不十分である。	「検証結果」に対する「考察」は示されているが、根拠が不十分である。まとめも研究を通して明らかになった事がわからない。	用紙が見やすい。	「声の大きさ」、「話す速さ」、「目線の送り方」のうち2つできている。
C	「テーマ設定」から「先行研究」、「仮説」へのつながりがない。	「仮説」に対して、「検証方法」も「検証結果」も整合性がない。	考察もその根拠もあいまいであり、まとめも感想になっている。	用紙が見づらい。	「声の大きさ」、「話す速さ」、「目線の送り方」のうち1つできている。

最後に本校校長、山形県教育庁高橋俊彦主任指導主事、山形大学山科勝准教授より講評をいただいている。本校校長は発表に対して生徒たちからの質問が少なかったことが指摘された他、研究者としてもっと背伸びして見ること、「とがった」考察をしてみる事が述べられ、さらにレベルの高い研究への取り組みへの期待が生徒たちに伝えられた。高橋主任指導主事は全体の課題としてデータの扱い方・分析・結論への結び付け方に甘さがあることが指摘され、特に理系の研究で実験や観察にもっと注力すべきであるということが述べられた。一方、生徒たちの発表態度は堂々としており、発表者がコミュニケーションをとろうとしている点が良いという評価も得ている。山科准教授は研究が100%の完成度でない点が魅力であり、インターネット上にある情報を「答え」とせず、表

面的知識を経験を通して本当の知識に変えていってほしいという希望が述べられた。

3人の講評から見えてくる今後の課題は、①生徒の質問力向上、②データ分析の深化である。次年度の「研究発表実践」でこの2点を改善していけるような働きかけをしていく必要がある。

なお、成果発表会の翌週には「山形県探究型学習課題研究発表会」が山形市で開催され、一般コースから2テーマ、探究コースから2テーマ、地域探究部より1テーマが参加した。この中で『“出汁”を利用しておいしく減塩することは可能か』が優秀賞を受賞している。

【令和元年度山形県探究型学習課題研究成果発表会 参加テーマ】

一般コース
『昆虫の小型化のように人間小型化するのか』
『香りと集中力』
探究コース
『“出汁”を利用しておいしく減塩することは可能か』
『新庄市はふるさと納税で税収を増やせるか』
地域探究部
『戸沢村角川を元気にするプロジェクト』



⑩論文執筆

探究活動のまとめとなる論文を例年通り課したが、今年度はそれに加えて探究活動全体の振り返りも行わせている。冬期講習の時間を利用して対話を中心とした振り返り活動に取り組ませた。

振り返りは右に示した「指導の流れ」に沿って進められたが、本校の総合的な探究（学習）の時間は毎時「指導の流れ」が作成され、実施日の前日に校内ネットワークで全職員に配信されている。



12月18日 2年次探究コース 課題研究 指導の流れ 地域理解発展研究の振り返り			
実施校時：6校時 場所：教室 本時の目標：地域理解発展研究における探究活動を振り返り、課題研究における取り組みの指針とする。 指導の流れ：探究学習ノート・地域理解発展研究編、ルーブリック、リフレクションシートを準備させる。			
項目	時配(分)	ワーク	ポイント
導入	5分	・本時の説明	・本時は成果発表会の振り返りを行った後、地域理解発展研究全体の振り返りを行い、その結果を今後の課題研究に活用できるようにすることを述べる。
活動	24分	1 成果発表会の振り返り ①個人ワーク（3分） ・ルーブリックを見ながら、達成できたと思う欄に○をつける。 ②グループワーク（21分） ・グループ内でルーブリックの個人評価を照合し、全体での達成度を確認。（7分） ・評価シートを回し読みする。（7分） ・評価シートの内容を参考にして、再度全体での達成度を確認する。（7分）	・個人評価 ↓ ・グループ内評価 ↓ ・リフレクションシートによる客観評価 ↓ ・グループ内再評価のの流れとなる。
	20分	2 地域理解発展研究の振り返り ①テーマの提示と選択（3分） i 率直な感想 ii 習得できた力は何か？ iii 残った課題や今後必要な方は？ iv 今だから言えること v グループ以外の人に伝えたいこと ②フリートーク（8分×2テーマ）	・黒板に5テーマを板書し、2テーマを選ばせる。 ・1テーマにつき、グループ内で8分間のフリートークを行わせる。 ・探究学習ノートP72の「成果発表会までの振り返り」にトークの内容はメモさせていく。
まとめ	6分	探究学習ノートで最後の振り返り グループ解散	・探究学習ノートP73の「地域理解発展研究を結んで」を記入。 ・「ありがとう」を交わしてグループ解散。

研究テーマ

奥羽新幹線は実現すべきか？

【指導者】山形県企画振興部

総合交通政策課 さん

山形県最上総合支庁総務企画部

総務課 さん

1 はじめに

地域にかかわる大きな事業である新幹線事業がもたらす影響を調べることは地域の未来にとって大きな意義があると考えたため研究を行った。

2 本論

(1) 先行研究の概要

①立命館大学の「整備新幹線と地域振興効果」という論文から新幹線事業の人口や経済への影響を調べた。高速道路・新幹線があることによって人口増加と経済波及効果もたらされることが分かった。また、その効果はミニ規格新幹線よりフル規格新幹線の方が大きいことが報告されている

②最上総合支庁へのインタビュー

奥羽新幹線実現のメリット

- ・移動が高速、安全、安心になる。
- ・県外の大学に通えるようになる。

奥羽新幹線実現のデメリット

- ・莫大なお金がかかる。
- ・在来線の管理が負担となる。

(2) 仮説

新幹線事業は大きな費用を必要とするため、自治体の財政に与える影響も大きい。そのため県民の同意を得られる利益を確認し、地域にとってどのような利益・不利益があるか確かめることが重要である。

(3) 検証方法

①アンケート調査

対象：新庄市民 48 人 年齢層：10 代～80 代
目的：市民のフル規格化に対する意見を聞く。
内容：メンバーが紙面で調査。

②収支試算

対象：東北・北陸・九州・長野新幹線

内容：4つの新幹線による経済効果と各地域の経済規模から山形県の経済規模における新幹線建設による経済効果を算出した。

(4) 検証結果

①アンケート調査

賛成 33 人、反対 9 人であり、賛成の理由では移動が速くなるからというものが最も多かった。反対の理由では費用が高額であるからというものが最も多かった。

②収支試算

収支試算の結果から、山形県は新幹線専用線路建設費に 1181, 37 億円、新幹線が通過する自治体の在来線維持費に年間 1 億円の支出があることが分かった。また県としての経済効果は 5 年で 225 億円生じることが分かった。

3 考察

収支試算の結果から、収入が支出を上回るのは建設から 28 年後だと分かり、財政面で課題があるという結果となった。

アンケートの結果からは、新庄市民の 8 割が賛成、2 割が反対、また山形新聞が行ったアンケートから、県民の 6 割が賛成、3 割が反対、1 割が中立であることが分かった。以上のデータから、県民の希望的には仮説は成立するも、財政面の課題については検討の余地を残した。

4 結論

財政面の課題を克服するために私たちができることは、今まで得た情報を組み合わせるなどして新たな費用の捻出、削減方法を考えることである。また、私たち高校生にできることとしては、今回の研究のように自分たちなりに調査をしてシンポジウムなどで発信をしていくことである。

<参考文献・引用文献>

新庄市政策経営課(2009) 『統計でみる新庄市』
MONEYzine 産経ニュース 2017 年 10 月 6 日
<https://moneyzine.jp/news/>
山形県奥羽・羽越新幹線整備実現同盟
<https://www.ou-uetsu-shinkansen.jp/>

一般コース 課題研究

一般コースでは総合的な学習の時間において「課題研究」(1単位)が展開されている。事業実践には位置づけられていないが、参考までに年間計画と生徒達の研究テーマを掲載しておく。

月	時数	内 容
4月	2	先行研究調査・仮説立案
5月	2	先行研究調査・仮説立案
	1	発表準備
6月	1	発表準備
	1	リハーサル
	1	分野ごとに一次発表会
	1	仮説再考・検証方法立案
7月	2	仮説再考・検証方法立案
9月	3	検証結果分析
10月	2	発表準備
	1	リハーサル
	2	中間発表会
	1	発表内容修正・論文執筆
11月	1	論文執筆
12月	1	発表準備
	1	リハーサル
		課題研究成果発表会
1月	1	まとめ・論文修正

分 野	テ ー マ
人文 ・ 国際	人の感情や行動を知れば万引きを防げるのか
	じゃんけんで相手の出す手をあやつることができるのか
	ドイツの敗北はヒトラーの采配によるものか
	「猫は魚が一番好き」というイメージは本当?
	最近のドラマの視聴きっかけは SNSにあるのか
	新庄にクリスマスが広まったのはいつか
	嘘をつくときに身振りが増えるのか
	めざましテレビの占いは当たっているのか
	人々がスマホから離れる方法とは?
	朝の占いは当たるのか
	幸せと努力は正の相関関係にある
	新北生が気になるうわさは本当なのか
	初対面の相手に好印象を与えるためには
	新北生と仲良くなるには

法 ・ 経済	スマホゲームが人気な中、コンシューマーゲームは生き残れるか
	日本の通貨が全て仮想通貨に置き換わったら、経済は成り立つのか？
	ディズニー側の戦略は成功しているのか
	流行予想色は消費者の心理に影響するのか
教育 ・ 芸術 ・ スポーツ	日本人の自信が低い理由
	CDのデザインは人の興味に影響を与えるのか
	筋トレは休みを入れることで効率的につけられるのか
	定期テストをなくしたら、成績は上がるのか
	最も太る食べ物・痩せる食べ物が判明！
	今の高校生は音楽を聴くとき歌詞を重視して聴く？！
	音楽の好みはコードで決まるのか
	棒読みの演技でもBGMの力で感動させられることができるのか
	秋のコーディネートについて
	複数の音楽ジャンルを手掛けるアーティストは人気が出るのか
	大学ランキングトップ10はなぜアメリカとイギリスがしめているのか
プロテインは体脂肪率と筋肉のつき方にどのような変化をもたらすのか	
理 ・ 工 ・ 理工	動物の小型化のように人間も小型化する可能性があるのか
	バドミントンはラケットが違くとシャトルの飛び方は変わるのか？
	ゲームは集中力に影響があるのか
	高校生にとって最適な睡眠は時間によって決まるのか～6時間 VS 7時間～
	香りと集中力の関係
	テレビゲームが脳にもたらす影響
医療 ・ 福祉 ・ 農 ・ 栄養	食べすぎは工夫次第で改善できるのか
	味は味覚だけで決まるのか
	昆虫食で生活することはできるの？～Back to nature with 盛岡～
	「きゅうりダイエット大作戦！」～きゅうりを食べるとやせるのか？～
	一緒に食べる組み合わせによって、体重に増減はあるのか
	本当に看護師不足が解消できるのか
	勉強中お腹がすかないためには



A-d 発表実践

次年度の3年次から実施される学びであり、探究推進課で準備を行ってきた。昨年度から3年次の担任団が取り組んできた小論文や面接練習の実践事例を基にして、地域理解プログラム・地域理解発展研究（課題研究）の内容を他者に伝えるトレーニング、2年間の学びによる自己成長の確認を行わせようとしている。教材となる「探究学習ノートⅢ 発表実践編」は3月に完成、年間計画もほぼ完成しており、4月から学習活動を展開できるようになっている。

【発表実践 令和2年度計画案】

		一般コース	探究コース
月日	曜	内 容	内 容
4/14	火	発表実践① (自己PR・過去の実践ふりかえり①)	発表実践① (検証結果分析①)
4/21	火	推薦・A0・学習合宿ガイダンス	推薦・A0・学習合宿ガイダンス
4/28	火	発表実践② (自己PR・過去の実践ふりかえり②)	発表実践② (検証結果分析②)
5/		本校卒業生の講演	本校卒業生の講演
5/12	火	奨学金ガイダンス	奨学金ガイダンス
5/19	火	発表実践③ (志望理由書・自己とポリシーのマッチング①)	発表実践③ (発表準備・リハーサル①)
5/26	火	進路集会 (進路指導資料説明・出願シミュレーション)	進路集会 (進路指導資料説明・出願シミュレーション)
6/2	火	発表実践④ (志望理由書・自己とポリシーのマッチング②)	発表実践④ (発表準備・リハーサル②)
6/9	火	小論文①	小論文①
6/16	火	小論文②	小論文②
6/23	火	発表実践⑤ (面接・自己PRと志望理由の発表①)	発表実践⑤ (後輩たちへ研究アドバイス)
6/		進路研究①	進路研究①
6/		進路講演会	進路講演会
6/		進路講演会	進路講演会
7/7	火	進路集会 (前期講習開講式)	進路集会 (前期講習開講式)
7/14	火	発表実践⑥ 面接・自己PRと志望理由の発表②)	発表実践⑥ (課題研究成果発表会)
7/	火	小論文③ (小論文模試)	小論文③ (小論文模試)
7/	火	小論文④ (小論文模試)	小論文④ (小論文模試)
7/		進路集会	進路集会
9/8	火	センター試験出願ガイダンス	センター試験出願ガイダンス

9/8	火	センター試験出願ガイダンス	センター試験出願ガイダンス
9/15	火	進路研究②	
10/6	火	発表実践⑦（コース別実践）	発表実践⑦（コース別実践）
10/13	火	発表実践⑧（コース別実践）	発表実践⑧（コース別実践）
10/20	火	発表実践⑨（コース別実践）	発表実践⑨（コース別実践）
10/27	火	発表実践⑩（コース別実践）	発表実践⑩（コース別実践）
1/15	金	大学入試共通テスト激励会	大学入試共通テスト激励会
1/15	金	大学入試共通テスト激励会	大学入試共通テスト激励会

本校において3年次生に対する面接指導・小論文指導は極めてきめ細やかに行われてきた。生徒たちは面接ノート・小論文ノートなどを独自につくり、受験に備えているが、高校生活における自己の成長を言語化できないという悩みに直面することが多い。次年度は「発表実践」が展開されることで、高校における学びの成果を振り返る機会が保障されているが、生徒個々が自らの力で自分の学びの成果と成長を伝えられるようになる教材が必要であると探究推進課で判断した。こうしたことから、4冊目（探究コースにとっては5冊目）の探究学習ノートである「探究学習・ツールノート」の作成を進めている。ツールノートは就職志望、進学志望問わず活用できる構成を目指している。「関係づけ」・「アイデア創出」・「理由づけ」といった目的に合った思考事例（イメージマップ、ステップチャートなど）を紹介することで、生徒の振り返り活動の充実化を促す他、生徒罫線ページ・白紙ページに自分の考えを自由に書き込むこともできる。一方、教員にとっては、全ての生徒が同じフォーマットのノートを使用するために助言指導が行いやすくなる。

生徒たちが「発表実践」の学びを経て、「探究学習・ツールノート」を活用した自ら学びに向かう姿勢を見せてくれることに期待したい。

A-e 地域系部活動の設置

地域系部活動として4月に「地域連携部（仮称）」が発足し、地域協働活動のフロントランナーとして活動している。地域連携部のみの所属も可能であるが、他の部活動との兼部も可能である点が最大の特徴である。現在、本入部の状態の生徒は3名であり、それぞれがプロジェクトを持ち、その実現のために探究活動に臨んでいる（兼部生徒も含めると30名ほど）。

- モデルとしているのは島根県津和野高校の「ブリコラージュゼミ」である。このゼミのねらいは、
- ・「今、ここにあるもの」に気づき、それを活かすこと
 - ・自分に合ったやり方で社会に関わること
 - ・経験したことを、言葉にして表現すること

であり、「地域連携部（仮称）」でも同様のコンセプトで活動を展開している。なお、9月の運営指導委員会で部員から部名を「地域探究部」にしたいという願いが出ていることが報告されたことで、以降は「地域探究部」略して「チタン」が正式名称となった。

部長の生徒はかねてから戸沢村角川地区の元気プロジェクトの活動に参加しており、今年から中・高校生の組織であるユースチームを任せられ、地域の子どもの中心となって活躍している。1年生は地域の防災について考え、近隣の町内会との「防災運動会」、方言である新庄弁を活用した地域イベントの計画を進めている。2人ともジモト大学で大人の意見をいただくなどして、自分のプロジェクトを洗練させてきた生徒である。地域探究部全体としては新庄市を違った角度で見ようという発想から夕暮れ時の新庄市路地裏ツアーの企画と運営、1月からは新庄駅前商店街への人の流れを作る方法を考察している。

新庄・最上LINKプロジェクトが市民に周知される中、子供会企画のプロデュースを地域探究部に依頼できないかといった依頼が近隣から寄せられるようになっている。

【地域探究部の活動実績】

月	活動内容
4月	12日 地域連携部（仮称）発足・部員募集
	24日 部集会
	28日 第1回新庄市内フィールドワーク
	29日 新庄市スポゴミボランティア参加
5月	3日 青山学院大学黒石いずみゼミ 新庄市内フィールドワークに参加
8月	7～9日 SCHサマーキャンプ（最上郡大蔵村）に参加（兼部生徒）
	14日 角川サマーパーティー
9月	28日 第2回新庄市内フィールドワーク
	30日 地域探究部に部名決定
10月	26日 夕暮れまちなか探検を実施



11月	2日 ジモト大学 「道の駅」の楽しみ方を研究員と一緒に考えよう！参加 10日 ジモト大学 マイプロジェクト・スタートアップキャンプ参加
12月	21日 山形県探究型学習課題研究発表会参加 23日 ジモト大学フォーラム ファシリテーター研修会に参加
1月	25日 新庄市内フィールドワーク 27日 フィールドワークの振り返り 「新庄駅前に人を流す」の考察開始
2月	8日 ジモト大学フォーラム 第2回ファシリテーター研修会に参加 12日 ジモト大学フォーラムにて発表「戸沢村角川地区を元気にするプロジェクト」 地域の大人と高校生の対話をファシリテート

【地域探究部の活動事例】

戸沢村角川を“元気”にする プロジェクト

山形県立新庄北高等学校 地域探究部

<動機>

小中学校の廃校や、昔にぎわっていた地域ごとのイベント数の減少や人口減少が著しい戸沢村角川地区において、20～40代の大人を中心に高校施設を活用して交流拠点を創出して地域活性化につなげている「角川元気プロジェクト」の活動に刺激を受け、地域の中高生とともに、角川の活性化に貢献したいと思った。

<仮説>

中高生が主体的に大人とともに活動を行うことで若者が活躍する機会が増え、角川地区を活性化することができる。
活性化 = 地域内交流が活発な状態

<角川元気プロジェクト youthTEAM 紹介>

- 戸沢村角川地区の中高生13人が所属、今年6月に発足
- ① 角川の現状を理解し、自分たちの手で自発的・主体的に角川を創る
- ② 活動を通して企画力・運営力を養う
- ③ 大人との共同により、一体となって角川の未来を創る

youthTEAM
オリジナルマーク

<活動の成果と課題>

成果

- イベント全体では大人との共同作業により結束が強まり、「共に地元を盛り上げよう」という意識が高まった。
- 中高生が「できることがある」と知り、中高生で集まって話をする機会が増えた。

若者同士の交流

- 子供からお年寄りまで様々な人との交流があった。

世代を超えた交流

- 地域の方から励ましの声があり、地元の未来について意見を交わした。

地域内コミュニケーション

⇒仮説は正しい。

課題

- 人によって意識、行動力に差がある。
- 企画の段階で一から自分たちで企画するのではなく、ある程度大人の見解に影響されることがあった。

<これまでの活動>

- ① 8月 角川サマーパーティー2019
in 旧角川小中学校
- ② 9月 争の滝トレッキング道 核機取り付け
- ③ 11月 JA おいしいもがみ戸沢SS祭り & とざわ旬の市

出店の様子→

<今後の展望>

これまでの活動や課題をもとに、

- ① 中高生が自分たちで企画
- ② 企画したものを大人に提案し実行することによって地元角川のさらなる活性化に貢献していく。

主典 <https://coelog.chuden.jp>

B-a 地域連携アプリの開発

ジモト大学の問題点として、生徒の参加申し込み、振り返りを確認し、未提出者への督促を行わなければならないという担任の負担があった。その負担を軽減し、ジモト大学への生徒参加を効率化するために今年度、株式会社JPDの赤川健一氏の尽力により「ジモト大学アプリ」が開発された。このアプリではジモト大学の講座内容が紹介され、生徒は参加を希望する講座を選択してアプリ上で申し込み・キャンセル・参加後の振り返り記入をすることができる。教員は生徒の参加状況を校内のパソコンで確認することができ、ジモト大学における体験活動の内容、参加後の変化などを生徒との面談の中で確認することができるようになった。ジモト大学の運用の効率化だけでなく、教員の生徒理解の上で非常に有益なツールとなっている。

[回答]プログラムを通じて、学んだことを記載してください	
回答者	回答
新北太郎	大人の方と話しこまらないうでリラックスして話すことができとても楽しかったです。仕事は楽しむものだとことを学べました。
笠原 幸	最上で働いてもあまり不自由なことはないのだなと思った。逆に東海が近いなどいいところの方がたくさんあっていいなと思った。
北川花子	休みの日や仕事の日メリハリのつけ方をマネしたいと思った。時間の使い方が上手で、自分は下手なので先輩がたのを取り入れていきたいと思った。
最上川乃	地元での就職でのメリットがとてもよく分かりました。高校生の頃から将来のビジョンを持っておくことが分かり勉強になりました。また、地元への就職について考えてみよう
新庄北男	社内でのコミュニケーションが大切だと思った。常に学び続ける姿勢を学びたいと思った。
飛田裕一	最上地域に貢献することは大切な事だということを学んだ
北野公子	今回話を聞いたのは、サービス(銀行)と看護でした。どちらも仕事の日と休みの日のメリハリをしっかりとつけていて、私もそのように平日も休日も勉強はしないといけないとおもう
山形 実	働く女性は大変なのではないかと考えていたが、皆さん楽しそうに仕事をしていることがわかった。高校では地域のための活動もあるので、今回のお話も参考にしながら、さらに最上

※生徒名は変更しています。

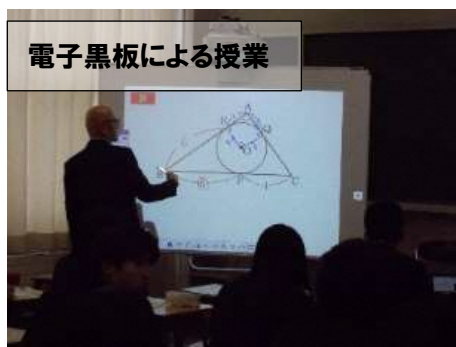
B-b 情報リテラシーの醸成

情報リテラシー醸成のため、各教科において ICT 機器の使用機会を増やしている。昨年度導入された 3 台の電子黒板を授業で活用する教員が増えてきており、生徒が撮影した写真データを電子黒板に映して全体で共有するなどの授業が展開されている。

地域理解プログラム・地域理解発展研究・課題研究においては先行研究調査の場面で ipad を活用させるようにしている。特に 1 年次においては、地域理解プログラムの前半において「情報リテラシー」の単元を設定し、山形新聞最北総支社長の斎藤敏広氏による講演をいただき、公正かつ正確な情報発信のために新聞社が留意していることを生徒は学んだ。この講演に続き、生徒は新聞・雑誌・インターネット記事の読み比べを行い、それぞれの表現・想定している読み手・根拠の違いを分析した。このように、「情報リテラシー」の単元で生徒は情報の受け取り方と発信の仕方を学び、公正かつ正確な情報発信を意識するようになっている。

1 年次の授業の中で、島根県立津和野高校の生徒が学校 PR 動画を作成し、Youtube で閲覧することができるようにしている話を伝えた。この動画は撮影と協力の面で地域の大人の力を借りて作られており、流れる歌はフリー音源に歌詞をつけているものなので著作権的に問題はない。「大人の力を借りて、高校生ができることを実現する」ことを示す好例と言える。同様の話を 2 年次探究コースの生徒にも伝えたが、この事例が本校生徒を刺激したのか、今年度の 1 年次生ではスマートフォンや SNS を活用した情報収集やプレゼンテーションが見られた。新庄市の伝統菓子である「くぢらもち」について探究したグループはInstagramにくぢらもち活用方法のアイデアを掲載し、市民の方からの意見を集めることに成功している。また、自分たちで集めたデータをスマートフォンに映し、紹介するグループもあった。

また、9 月に開催された L I N K プロジェクトに関わる運営指導委員会では、大正大学の浦崎太郎先生、津和野高校のコーディネーターである牛木力さんに Web 会議システムを活用してアドバイスをいただいたが、この時に構築されたシステムを利用し、2 年次探究コースの生徒が牛木さんから探究活動についてのアドバイスを仰ぐこともできた。



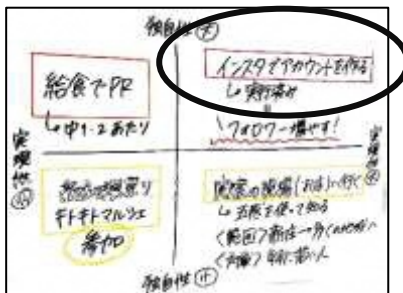
電子黒板による授業



パソコンで活動の成果をまとめる



スマートフォンを活用した発表



Web 会議アプリの活用

C-a アカデミック・インターンシップの取組

アカデミック・インターンシップについては現在準備を進めている。土台となるのは1年次で実施した新北版トーク・フォークダンスである。地域の企業の方を招き、高校生との対話を何度か行ってもらい、高校生の地元企業に対する理解を深めることを目的とする。現在のところ7月下旬に新庄北高校を会場として以下のように開催する予定である。

実施日時・場所

日時：令和2年7月21日（火）または7月22日（水）の午前から昼すぎまで
場所：新庄市民プラザ大ホール（予定）

実施内容

大卒求人を出す企業・団体にお集まり頂き、以下の内容について企業説明会を実施する。

- ・企業による説明
企業・団体の説明、仕事のやりがい、社員数・構成比（男女、大卒従業員、離職率など）、大学での学びとのつながり、労働条件や福利厚生など
- ・対話・質疑応答
設定時間にもよるが、企業による説明についての対話と質疑までの流れを4～6セット繰り返す。
- ・現段階で就職したい企業・団体についてアンケート
企業名だけでなく、印象に残った点、良かった点もまとめ、企業に返却する。

検討事項

- ・「若手社員」とはどのくらいの経験の方を想定しているか
企業PRの際に、「若手社員」の方を派遣して頂けるかは企業次第である。人事責任者となると、若手ではなくなる可能性がある。

なお、アカデミック・インターンシップのイメージとしては、ジモト大学で実施されている「しごとトーク」のスタイルに近いものになると考えられる。



C-b 研究実績の進路指導への活用

- ・3年次生は本事業の取組みの対象からは外れているが、学校が地域と協働して動こうとしている雰囲気は感じ取っている。地域理解プログラムの内容等も武器にしながら東北大学2名をはじめとする国公立大学推薦・AO入試合格11名、私立大学でも青山学院大学など著名大学に合格者が出ている。

D-a 「ふるさと科目」の開設と教材開発

次年度より学校設定科目として開講される「ふるさと科目」の準備を校内研修や研究授業を重ねつつ進めてきた。以下がその過程である。

7月	探究推進課によるふるさと科目シミュレーション
9月	探Qカフェ 不安・疑問の共有とアイデア創出
10月	公開授業予告
11月	授業テーマ集約
12月	公開授業
2月	シラバス案の完成 評価基準の策定

9月の探Qカフェでは集まった職員から「ふるさと科目」実施に対する不安や疑問の集約を行い、職員間で不安・疑問の共有化をはかることでチームワークの向上をはかった。

【「ふるさと科目」実施に対する不安や疑問】

- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| ・評価をつけるのか？何を評価するのか？ | ・目標はみんな同じ？ |
| ・いつからするのか？ | ・詳細がよくわからない（何をすればいい？） |
| ・どれくらい（時間数）やるのかがわからない | ・誰がするのか？ |
| ・何をやっていいのか、悪いのか？ | ・総合的な探究の時間とのつながりは？ |
| ・テストもそれ専門にするのか？ | ・特別な教材が必要なのか？ |
| ・教科なのか？ | ・大変かな？ |
| ・何単位分なのか？ | ・何を教えた方がいいのか？ |
| ・「ふるさと」ってどこ？ | ・来年の2年生では実施しないのか？ |
| ・大テーマでくくるのか？ | ・横並び？同じ日に実施？ |
| ・教員一人でやるのか？グループでやるのか？ | ・学校設定科目？ |
| ・校外の人も巻き込むのか？ | |
| ・事業が終わった際のカリキュラムはどうなるのか？ | |



探Qカフェでは各教科でどのような授業が可能かを検討してもらったが、86の授業アイデアが出されている。このアイデアも基にして、12月12日の公開授業では、主に1年次を対象に「ふるさと科目」の試験的運用を行った。各教科で「ふるさと」を題材として授業を展開してもらい、生徒への地域知識伝達を試みた。以下は公開授業における授業テーマである。授業実施にあたっては「ふるさと探究指数」（以下「FT指数」）を設定した。0<FT指数<100とし、地域題材を必ず活用することにした。また、FT指数が100になると「地域学」となってしまうことを避けるために、教科の特色も考慮することを条件としている。

【12月の公開授業における各教科の授業テーマ】

教科	科目	授業テーマ	FT指数
国語	現代文	小説から心情（新庄）を読み取ろう	70
		『土に叫ぶ』を読む	60
	古典	新庄北高校校歌の品詞分解（助動詞）	70
数学	数学A	データで見る新庄の降水量・降雪量	50
英語	コミュニケーション英語I	廃油を原料に動く車が、新庄でも活用できそうか、本文を読んだ後に考えます。	20
	英語表現I		
地歴	世界史A	マンホールから世界を見る	50
理科	生物基礎	バイオームと温かさの指数	20
保健 体育	体育	花笠踊り・器械運動	15
	保健	交通事故の現状と要因	10
芸術	美術	くじらもちバカ売れプロジェクト	80
	音楽	小学生と音楽を用いたコラボ企画を考えよう	75

【世界史Aの授業で用いた新庄市のマンホールの蓋】



市の花である“あじさい”と市の木である“もみ”の下に描かれている”生命樹“の由来について学ぶ授業。

【新庄市の伝統菓子 くぢらもち】



伝統菓子である“くぢらもち”の知名度アップと売り上げ向上策を考える授業。

2月には以下に示した次年度のふるさと科目のシラバス原案と評価基準案が完成し、山形県教育委員会の確認を受けている段階である。

学校設定教科・科目の設定に関する説明資料

学校設定教科・科目を適用する学校の管理機関	山形県教育委員会
学校設定教科・科目を設定する学校	山形県立新庄北高等学校

設定する学校設定教科・科目の内容

教科・科目名	ふるさと探究・ふるさと探究
単位数	1単位
対象学科・学年	普通科・1年
必履修・選択の別	必履修
設定する教科・科目の内容	<p>新学習指導要領の基本理念となっている「社会に開かれた教育課程」を実現させることを目指し、進学する生徒の多い学校における普通科目の中で地域題材をどのように扱うかのモデルを、全国の学校のフラッグシップとして構築する。また、地域と協働した探究活動に深さを与えるために、各教科における学習指導用要領の科目を土台にして、地域社会の題材を深く取り扱い、社会や世界の状況を幅広く知るための地域の情報をインプットする。この教科・科目を通して生徒に付けさせる資質・能力は次のようなものである。</p> <p>(1) 総合的な探究の時間で活用する地域に係る知識を身に付ける。</p> <p>(2) 地域の題材を活用して普通科目の内容を学ぶことで、普通科目において学習した内容を実社会に活かす経験を積み、生徒の生きる力を養う。</p> <p>(3) 各教科で地域について教科横断的に学ぶことで、多角的に知識を活用する力を養う</p> <p>また、教員自身の地域に対する理解の度合いを大きく向上させ、教員の資質・能力を向上させることもこの教科の目的のひとつである。</p> <p><u>スタートアップ講座「地域について学ぶということ」</u></p> <p>地域について学ぶ意味</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講話「地域について学ぶということ」／実習 <p>地域のために何ができるか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジモト大学プロジェクトについて ・三菱UFJ魅力化評価システムについて <p><u>テーマで学ぶ「まつり」</u></p> <p>地歴公民「新庄まつりの物語①歴史編」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ユネスコ無形文化遺産「新庄まつり」の歴史 ・新庄まつりの山車ではどんな場面を扱っているか

	<p>国語「新庄まつりの物語②山車は何を語るか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新庄まつりの山車で題材とされているものを原文で読む。 五条大橋(出典：義経記)・弁慶仁王立ち(出典：義経記) 大江山酒呑童子(出典：御伽草子)・碓知盛(出典：平家物語) ・レポート作成 <p>英語「新庄まつりの物語③インバウンド入門」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インバウンド、新庄まつりの基礎知識を英文で身に付ける ・「新庄まつりを訪れる動機」「困っていること」のブレインストーミング ・新庄まつり中に、外国人観光客に英語でインタビュー ・外国人観光客へのインタビューで得た情報をグループで共有。英語でまとめ。 ・グループでの発表。レポート作成。 <p>「地域について学ぶ」</p> <p>地歴公民「新庄・最上でSDGs」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新庄・最上地域の概要 ・温暖化、環境破壊、水資源、エネルギー問題、リサイクル、等の問題を地域を題材にシミュレートする <p>数学&情報「新庄・最上をデータを通して見る」</p> <p>探究活動で必須となる統計処理の知識を、地域のデータや過去の先輩の研究内容を題材にして、実際に使える形で身に付ける</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報の収集／Webを活用した情報検索や特性 ・代表値の使い分け・データの加工・編集／データを比較する際に注目すべき代表値 ・標本調査／無作為抽出の留意点や母集団と標本の比較 ・グラフのトリック、表やグラフの活用／意図的に印象を変えられるグラフの注意点 ・仮説検証の考え／期待値 <p>理科「新庄・最上の自然をサイエンスする」、家庭科「郷土の食を守る」 芸術「地域のために私ができること」、保健体育「最上っ子の弱点はどこだ」</p>
<p>その他 特記事項</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の題材を扱う地域100%(FT指数=100)の地域科目にせず、普通科目でどう地域題材を取り入れていくかを探る。FT指数=ふるさと探究指数(地域題材の割合) ・各教科におけるレポート、プレゼンテーションにより評価する。

①ふるさと科目シラバス

	内 容	時数	留意事項・指導方法	
7 月			<p>《地域の題材の扱い方》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「FT指数(ふるさと探究指数)=地域題材を扱う割合」を定義 ・必ず地域の題材を扱うが程度は制約しない 0 < FT指数(ふるさと探究指数) < 100 ・FT指数=100としない。 (各学科に共通する)各教科・科目を土台にしていない教科(地域科目)にするのではなく、(各学科に共通する)各教科・科目でどう地域題材を取り入れていくかのモデルを構築する。 <p>《評価について》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価規準については別添の評価規準による。 ・主に各教科の担当時間で実施するレポート、プレゼンテーションにより評価する。 <p>《学習指導要領の教科・科目との関連》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必修科目で必要な知識を学んだ後、または時期を合わせて、実際の社会や探究活動の中でどのように活かされていくのか「応用」を学ぶ。 ・SDGsなど必修科目であり扱われていない分野について、地域を題材にして学ぶ。 	
		<p>【ふるさと探究特別講座】</p> <p><u>スタートアップ講座「地域について学ぶということ」</u></p> <p>○地域について学ぶ意味</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講話「地域について学ぶということ」／実習 <p>○地域のために何ができるか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ジモト大学」プロジェクトについて学ぶ ・地域のために働いている方と触れあう ・三菱UFJ魅力化評価システムの概要について学ぶ <p><u>テーマで学ぶ「まつり」</u></p> <p>○地歴公民</p> <p>「新庄まつりの物語①歴史編」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ユネスコ無形文化遺産「新庄まつり」の歴史 ・新庄まつりの山車ではどんな場面を扱っているか <p>○英語「インバウンド入門①</p> <p>～外国人はどんなことに興味を持っているだろう～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インバウンド、新庄まつりの基礎知識を英文で身に付ける ・「新庄まつりを訪れる動機」「困っていること」のブレインストーミング ・外国人観光客へのインタビュー原稿作成&練習 ・外国人観光客へのパンフレットを作成する ・外国人観光客への動画を作成する 		<ul style="list-style-type: none"> ・東北芸術工科大学・地域コミュニティデザイン学科等から講師を招く。 ・7月下旬～11月に実施の「ジモト大学」への導入を兼ねる。 ・「三菱UFJ魅力化評価システム」への導入を兼ねる。
				<p>○本校の英語科においては「スピークアウト」方式を導入して、学んだ知識を積極的にアウトプットさせている。これを実際の地域社会でアウトプットする機会を提供する。</p>
				<ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ平易な英語で表現することを意識させる。 ・ALTにも協力を依頼 ・どのような活動をするかは生徒が選択する。
8 月 頃	<p>英語「インバウンド入門②</p> <p>～新庄まつりに外国人を呼び込もう～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新庄まつり中に、外国人観光客に英語でインタビューを実施し、レポートにまとめる ・作成したパンフレットや動画を外国人に紹介したりWebにアップする 		<ul style="list-style-type: none"> ・その他にも最上川舟下、地域の他の祭りなど、英語をアウトプットできる機会は積極的に活用する。 	
9 月	<p>英語「インバウンド入門③</p> <p>～新庄・最上の未来のために～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・諸活動で得た情報をグループで共有。英語でまとめ。 ・グループでの発表。レポート作成。 			

<p>9 ～ 1 月</p>	<p>地歴公民「新庄・最上でSDGs」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新庄・最上地域ってどんなところ？ ・地域から取り組む地球温暖化対策とは？(地球温暖化) ・地域で環境問題は起きているのか？(環境破壊) ・水不足がもたらすものは？(水資源) ・地域で発電事業を興すとしたら？(エネルギー問題) ・テレビはタダで捨てられるのか？(リサイクル) 	<p>5</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・グローバル、ローカル両方の視点でSDGsに係る問題を考える。 ・学指指導要領の教科・科目において、まとまった形で学ぶことのないSDGsを地域の環境を題材にして学ぶ。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・『令和元年度 最上地域の概況』を読ませ、自然・産業・人口などの観点を決め、グループで地域の特徴をまとめる。まとめた内容はワールド・カフェで共有し、地域に係る知識増につなげる。 ・前半において地球温暖化の知識の習得。後半はローマ・クラブの『成長の限界』と「最上地球温暖化対策協議会」の報告内容を読ませ、比較させ、新庄・最上地域における温暖化対策のあり方を考えさせる。 ・砂漠化や酸性雨、オゾン層破壊、生物多様性について説明し、新庄市下田地区の大気汚染環境データから、汚染原因の考察と今後の環境への影響を考えさせる。 ・水をめぐる問題をグローバルな視点で考察させた後、最上地域の河川利用データをもとにして、水資源が新庄・最上地域に与えている恩恵についてローカル視点で考えさせる。 ・現代のエネルギー利用の在り方を学んだ上で、最上地域において発電事業を行うなら水力・火力・原子力・太陽光・バイオマスのどれが良いか地形や風土の特徴、コストの面から多角的に考えさせる。 ・リサイクルの重要性について学んだ後、新庄市でテレビを捨てる際に、どのようなプロセスを経ることになるのかを予測させながら、リサイクル実行をシミュレートさせる。
	<p>地域と語り合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新北版トークフォークダンス 	<p>3</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トークフォークダンス形式で地域の多くの方と語り合う機会を設け、地域について学ぶこの科目への意識を高揚する。
	<p>国語「新庄まつりの物語②～山車は何を語るか～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新庄まつりの山車で題材とされているもの ・新庄まつりを分析する <p>【背景や歴史との関連を学ぶ原典】</p> <p>五条大橋(出典：義経記)</p> <p>弁慶仁王立ち(出典：義経記)</p> <p>大江山酒呑童子(出典：御伽草子)</p> <p>碓知盛(出典：平家物語)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新庄まつりの歴史 ・レポート作成 	<p>5</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・9月まで国語総合で古典文法の助動詞等の地域を学習している。知識を応用する題材として、地域にまつりにゆかりの深い原典を用いる。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・新庄まつりの山車で取り上げている場面を原文で読むことで、新庄まつりでこの場面が取り上げられている背景や、新庄まつりの歴史との関連などについて、より深く理解する。 ・地域の題材を扱うことで古典に対して、より積極的に取り組ませる。 <p>講義（テキスト読解） グループワーク 映像視聴</p>

<p>数学&情報「新庄・最上をデータを通して見る」 探究活動で必須となる統計処理の知識を、地域の実際のデータや過去の先輩の研究内容を題材にして、実際に使える形で身に付ける</p> <ul style="list-style-type: none"> 情報の収集 Webを活用した情報検索や特性について学ぶ 代表値の使い分け／データの加工・編集 複数のデータを比較する際に注目すべき代表値を探る。 標本調査 無作為抽出の留意点や母集団と標本の比較について学ぶ グラフのトリック／表やグラフの活用 意図的に印象を変えられるグラフの注意点を学ぶ 仮説検証の考え／期待値 	<p>5</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> 数学Iで統計を学習する時期に合わせて開講する。数学で学んだ知識を実際の探究学習でどのように活用していくか、過年度の生徒の課題研究等を題材にしながら学ぶ。 </div> <ul style="list-style-type: none"> 各市町村で公表している人口や面積などのデータをもとに、代表値として何を使うことが適切か考察する。 「新庄市民全員にアンケートを取りたいとき、何人に取ればよいか」など、過年度の1・2年次生の地域研究の中で生徒が陥りやすい点を参考にした題材について考えさせる。 地域で配布されているパンフレットを材料に、様々なグラフ表示について、その印象を考察する。 「学割〇%にして客が△%増えると店の収入はどう変化するか」など、過年度の1・2年次生の地域研究を参考にした題材について、仮定をグループごとに変えて計算・考察する。 		
<p>1 ～ 2 月</p> <p>芸術 「2年次に向けて ～地域のために私が できること～」</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域のひと・もの・ことに目を向け、音楽や美術の視点からよりよい社会や人間関係をつくるためのアイデアを探る。 アイデアを整理してテーマを設定する。 企画書を作成する。 必要に応じて外部と交渉したり、プレゼンテーションを実施する。 お互いに意見交換を行う。 	<p>保健体育 「最上っ子の弱点 はどこだ？」</p> <ul style="list-style-type: none"> 新庄・最上地域の体力テストの結果を分析して、地域の特徴を考える。 分析に基づいて、年齢に応じて起こりうる健康課題について考える。 地域の健康や体力向上に関わる外部講師の話を聴き、課題の要因の考察や解決策を考える。 	<p>家庭科 「新庄・最上の食を 守る」</p> <ul style="list-style-type: none"> 最上伝承野菜をはじめとする各地域で食べられている食材を調べ、まとめる。 昔から食べられてきた郷土食について調べ、実際に作ってまとめる。 郷土食材や郷土食を守るためにできることをまとめ、発表する。 	<p>理科 「新庄・最上の自然を サイエンスする」</p> <p>新庄・最上地域の 植生とバイオーム</p> <ul style="list-style-type: none"> 新庄・最上地域の生物多様性について考察 最上地域に生息する生物のデータベースを利用するほか、休日等を利用して自分の住む地域の生物の写真撮影等の調査を行い、クラス全体で情報共有を行う <p>満沢鉦山の歴史</p> <ul style="list-style-type: none"> 最上町満沢鉦山の歴史を元に金属の精錬の歴史を学び、酸化還元を理解を深める 授業後、調べたことや授業で学んだことをレポート形式で提出させる。 <p>5</p> <p>4 教 科 か ら 選 択</p>
<p>芸術・保健体育・家庭科はグループ単位の活動、理科は生徒個人の活動を中心に進める。</p>			

②評価基準案

教科	学習内容・テーマ	時数	観 点	観点ごとの評価規準	評価方法
国語	「新庄まつりの物語」 ②～山車は何を語るか～	5	①知識・技能	古文文法や単語の理解に基づいて、テキストの内容を正確に読み取ることができる。	小テスト レポート
			②思考・判断・表現	山車に採用された場面が、どのような視点から描かれているかを理解することができる。	
			③主体的に学習に取り組む姿勢	さまざまな山車の出典について着目できる。また、必要に応じて自ら読もうとすることができる。	
地歴 公民	「新庄まつりの物語」 ①歴史編	1	①知識・技能	「新庄まつり物語」：江戸時代後期の自然災害が与えた民衆生活への影響を説明することができる。 「新庄・最上でSDGs」：エネルギー問題や環境問題が地域でも生じていることを資料から読み取ることができる。	小テスト レポート 発表
			②思考・判断・表現	「新庄まつり物語」：祭礼行事を行うこと、歌舞伎を題材にすることが民衆に与える心理的影響を考察することができる。 「新庄・最上でSDGs」：地域の諸問題に気付き、解決・改善のために高校生としてできることを考え、提案（発表）することができる。	
	「新庄・最上でSDGs」	5	③主体的に学習に取り組む姿勢	地域の伝統・風土を継承し、より良い状態で後世に伝えていくための方策を考えることができる。	
数学 & 情報	「新庄・最上をデータを通して見る」	5	①知識・技能	統計処理に関する諸用語の定義について説明できる。また情報検索手法の各特性について説明できる。	小テスト レポート
			②思考・判断・表現	代表値やグラフ、調査手法を目的に応じて使い分けることができる。	
			③主体的に学習に取り組む姿勢	地域で公開されているデータに着目できる。また、必要に応じて自ら検証できる。	
理科	「新庄・最上の自然をサイエンスする」	5	①知識・技能	理科の各科目で扱う内容・用語を適切に用いて、地域課題について説明することができる。	小テスト 発表 レポート

			②思考・判断・表現	実験・調査結果等を正確に分析・考察を行い、発表等において適切に表現することができる。	
			③主体的に学習に取り組む姿勢	地域の各種データを科学的視点から着目できる。	
英語	インバウンド入門①	2	①知識・技能	インバウンドの定義や新庄まっりの概要を理解することができる。	発表 レポート
	インバウンド入門②	1	②思考・判断・表現	外国人観光客にインタビューする際や解答をまとめる際に、適切な表現を使うことができる。	
	インバウンド入門③	1	③主体的に学習に取り組む姿勢	外国人の視点から、自分にとって当たり前の環境を捉えることができる。	
芸術	「2年次に向けて～地域のために私ができること～」	5	①知識・技能	地元の人・こと・ものについての魅力や課題を自分の視点で洞察し、他者に伝えることができる	対話 生徒観察、 ワークシート（振り返り・企画書・レポート） など
			②思考・判断・表現	地元の人たちの生活にプラスとなり、笑顔になるための方法を考え、実行することができる	
			③主体的に学習に取り組む姿勢	他の生徒と対話を深めながら、自分の得意な力を生かし積極的に活動ができる	
保健体育	「最上っ子の弱点はどこだ？」	5	①知識・技能	データの中から正確に情報を読み取り、最上地域の特徴について理解することができる。	発表 レポート
			②思考・判断・表現	読み取った情報を正確に分析・考察し、体力向上に向けて取り組んだ内容を整理し、発表することができる。	
			③主体的に学習に取り組む姿勢	工夫した取り組みを互いに教え合い、評価することができる。	
家庭	「新庄・最上の食を守る」	5	①知識・技能	最上地域の食材について知り、地域課題について説明することができる。	発表 レポート 小テスト
			②思考・判断・表現	調査結果等を正確に分析・考察を行い、発表等において適切に表現することができる。	
			③主体的に学習に取り組む姿勢	地域の食の課題を知り、守り伝えていく方策を考える	

D-b 学校設定科目「Myエリア・ラーニング」の開設

学校設定教科・科目の設定に関する説明資料

学校設定教科・科目を適用する学校の管理機関	山形県教育委員会
学校設定教科・科目を設定する学校	山形県立新庄北高等学校

設定する学校設定教科・科目の内容

教科・科目名	My エリア・ラーニング
単位数	1～2 単位
対象学科・学年	全年次
必履修・選択の別	学校外における学修の単位認定
設定する教科・科目の内容	<p>「ジモト大学」の各講座、東北芸術工科大学主催のサマーアイデアキャンプ、新庄まつりや地元の祭りなどの伝統文化継承活動等の活動や研修に参加し、それを通じて学んだことをレポートにまとめたものを評価し、学校設定科目「My エリア・ラーニング」として単位認定する。地域における活動を教育課程上に位置づけることで、より積極的な活動に繋げる。</p> <p>それにより、生徒の個性や特性を伸ばし、生涯にわたる学習の基礎を培い、他者とかかわりながら意欲的に社会参加する態度の育成に繋げる。また、地域連携や地域活性化に関する活動への参加を通して得た知識や体験を基に、地域が抱える諸課題の解決策について活用していく能力を高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域連携や地域活性化に関する活動、又は各市町村の祭りなど伝統文化継承活動、ジモト大学の各活動、高等教育機関主催の地域連携に関する研修会等への参加（最上総合支庁、各市町村教育委員会、各伝統文化継承活動団体、NPO法人、東北芸術工科大学、等） <p>(認定する主な活動)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジモト大学プロジェクトの各講座 ・「ユネスコ無形文化遺産」に登録されている「新庄まつり」の若衆への参加 <p>(準備)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その他の市町村の祭りへの参加 ・ジモト大学フォーラムの準備・運営 ・50分×35時間相当以上の活動で1単位、50分×70時間相当以上の活動で2単位を認定する。

<p>その他 特記事項</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・単位認定する活動については、事前に打合せをして具体的に活動内容を確認したうえで、受け入れ側から了承を得た活動とし、原則として年度初めに示す。ただし、生徒から新規に申し出のあった活動については、年度の途中で認定する場合がある。 ・必要な書類が揃っており、活動内容や記載内容が十分満足できるものを認定することを保護者・生徒に周知する。
---------------------	---

学校設定科目である「Myエリア・ラーニング」は生徒の地域における活動を卒業認定単位に含めることができる（上限は2単位）。これによって、生徒が主体的かつ意欲的に地域で活動する意識を醸成し、地域活性化に貢献できる人材を育てることをねらいとしている。

Myエリア・ラーニングの単位として認定する活動は、原則として最上・北村山地区内の公的機関もしくはそれに準ずる団体等の受け入れ又は仲介による活動で、具体的には下記の地域連携や地域活性化に関する活動としている。なお、単位認定に係る規定として以下の項目を定めている。

- (1) 50分×35時間以上（総計30時間以上）の活動が認められた場合に1単位、50分×70時間以上（総計60時間以上）の活動が認められた場合に2単位を認定する。
- (2) 取得単位数は各年次0～2単位とし、卒業まで上限を2単位とする。
- (3) 認定を受けた単位は、卒業認定単位に含めることとする。
- (4) 一日あたりの認定時間数の上限を6時間とする。
- (5) 単位認定の時期は、1・2年次については年度末、3年次については1学期末または前期科目認定時または各成績会議において、あるいは臨時的単位認定会議を開き、認定できる。
- (6) 原則、単一年度内の単位認定とし、複数年度にまたがったの単位認定は行わない。
- (7) Myエリア・ラーニングの主担当を、教務課内に配置する。
- (8) 申請から認定までの手続きについて
 - ア 学校から生徒・保護者向け案内文書（校長名）配布
 - イ 全校集会で説明
 - ウ 希望者への説明会
 - エ 申請手続き（年度初め）→〔活動〕→報告（1学期末まで）→単位認定（年度末）

同様の取り組みは既に山形県立新庄南高校でも行われており、同校の申請書類や運用の方法を参考にしながら準備を進めている。将来的には新庄・最上地域の高校すべてが共通の書類と手続き方法によってMyエリアラーニングを地域全体の学びとしていくことが目標である。

地域の若者の中に高校時代に不登校気味になったが、地域の大人とともに取り組んでいた活動が支えとなり、現在は公務員として地域活性化を考えている人がいる。地域における活動の手ごたえとそれが正当に評価されるという経験は生徒たちの自己肯定感を高めることを示す事例である。Myエリアラーニングが一人でも多くの生徒にそうした効果をもたらすように準備を進めていきたい。

【Myエリア・ラーニングとして認定する祭り・伝統行事・伝統文化継承活動の例】

市町村	祭り・伝統行事・伝統文化継承活動
新庄市	新庄祭り囃子、若連（8/24～26）・仁田山鹿子保存会（8/2）、みちのく民話まつり（10月下旬）、萩野鹿子保存会、隠明寺凧保存会、新庄雪まつり（2月）
舟形町	人間ばん馬協議大会（6/2）、ふながた女神の丘縄文文炎祭（8月上旬）、縄文祭り、堀内田植え踊り保存会、幅神楽保存会、ふながた猿羽根太鼓保存会、長沢子ども遊々塾、ブナの実21
最上町	赤倉温泉夏祭り（8月中旬）、赤倉温泉お柴灯まつり（1月）、義経・弁慶太鼓、大堀神楽保存会、山と川の学校、富山観音太鼓保存会、東法田の田植え舞、大堀祭り、最上祭り、瀬見温泉伝統芸能保存会
真室川町	真室川梅まつり観梅会（5月上旬、平枝番楽（6月）、八敷代番楽（6月）、川ノ内囃子（7月）、真室川音頭全国大会（7月中旬）、真室川まつり（8月中旬）、釜淵囃子（9月）、番楽フェスティバル（10月中旬）、梅の里太鼓保存会、真室川ふるさとクラブ、及位の童歌保存会、釜淵番楽
金山町	金山まつり（8月中旬）、有屋少年番楽、安沢歌舞伎保存会、稲沢番楽、谷口銀山史跡保存会、明安子ども歌舞伎、めぐり地藏
大蔵村	合海田植え踊り（6月）、肘折温泉開湯祭（7/14）、四ヶ村の棚田ほたる火コンサート（8月上旬）、肘折温泉湯坐神社祭（8月中旬）、合海さんげさんげ（1/7）、地面出し競争World Cup in Hijiori（2月下旬）、大蔵太鼓保存会、おおくら葉山塾
鮭川村	庭月観音灯ろう流し（8/18）、羽根沢節保存会、清流さけがわ太鼓、鮭川村サーモンロードの会、段の下田植え踊り保存会、鮭川歌舞伎保存会
戸沢村	乙夜塾（4月）、和太鼓さみだれ（6月）、白山神社祭（8月中旬）、北の妙創郷大学（9月）角川元気塾、角川ふるさと委員会、角川太鼓を育てる会、真柄みこし会、蔵岡ふるさと塾、神田妙見塾、神田きこり倶楽部、古口白山神社祭礼ヤレノ行列
尾花沢市	尾花沢まつりばやし（6月）、花笠まつり（8/26～28）、寺内野尻太鼓、萩越拓魂太鼓、野黒沢義経太鼓、名木沢豊年田植え踊り、延沢城跡保存会、あおだんごと裸参り
大石田町	大石田まつり「最上川花火大会」（8/16）、川前地区ギフチョウ、ヒメギフチョウ保護会、次年子の箕づくり



新庄まつりの山車



萩野仁田山鹿子踊り

3 生徒の変容と2年目に向けて

1 目標の進捗状況、成果、評価及び次年度以降の課題及び改善点

仮説A「地域と密着した探究型学習」に係る仮説

- ①地域と密着した探究型学習を通し、地域の課題解決につながる実践を積むことで、地域に対する愛着が生まれ、地域に戻りたいと考える生徒が増加する。
- ②地域の課題解決につながる実践を積むことで、課題解決能力の高い生徒を育成できる。

【進捗状況】令和元年度には「地域理解発展研究」の開講、「地域探究部」の新設、「ジモト大学の大幅拡大、令和2年度開講予定の「発表実践」の年間指導計画及びテキスト作成を実施するなど予定どおりに進んでいる。

【成果及び評価】評価指標のうち「将来地元での就業を希望する生徒の割合」「成果発表会でルーブリックの最高評価を受ける生徒の割合」の調査は2月実施の成果発表会後の調査になるが、残りの指標である「ジモト大学における参加人数」は3割以上増加、「自主的な地域活動への参加人数」はほぼゼロだった数が10名近くの生徒が活動しているなど大幅改善。

【課題及び改善点】順調に進んでおり、このまま進めていくことになるが、課題としては県外に出て生徒が交流する機会が少なかったことから、令和2年度予算では生徒の旅費を増額している。

仮説B「ICT機器の活用」に係る仮説

- ①地域連携アプリを利用することで、地域連携の取組をより効果的に進めることができる。
- ②ICT機器を地域における探究活動に活用することで、将来の情報活用能力につながる情報機器を活用する能力、プレゼンテーション能力を含むコミュニケーション能力を育成することができる。

【進捗状況】ジモト大学 Web システム(地域連携アプリ)は開発を終え、今年度から運用を始めている。探究活動におけるタブレットやWeb会議システム利用などが順調に進んでいる。

【成果及び評価】評価指標の「ジモト大学プロジェクトへの参加人数」は3割以上増加、「地域連携アプリの利用回数(一人あたり)」についても全員が申込及び先方からの連絡の確認等で2回以上使っており目標を超えている。

【課題及び改善点】回線速度の不足から校内での活動が一定以上進められない(タブレット10台をWebにつなぐだけでもフリーズするが多い)。県のルールで県教育庁の統合サーバを使う必要があるが、市販回線を利用できないか検討する。

仮説C「新しいキャリア教育」に係る仮説

- ①地元企業との連携を強化したキャリア教育により、上級学校卒業後に地域に戻りたいと考える生徒の割合が増加する。
- ②eポートフォリオを活用することで地域における探究活動を活用して進学する生徒の割合が増加する。

【進捗状況】 トークフォークダンス形式のアカデミックインターンシップを1年生に導入。

【成果及び評価】 生徒だけでなく地域住民の側にも意識の変化が起きている。評価指標である「興味のある地元企業があると答える生徒の割合(アンケート)」は年度末の成果発表会後に調査、「e-ポートフォリオや探究活動の実績を活用してAO・推薦入試で進学した生徒数」について現3年次生は本事業の取組の対象ではなかったが、地域連携を武器にしながら東北大学AOⅡ2名、青山学院大などに進学。

【課題及び改善点】 同様な趣旨の取組が重複したことから、次年度に向けて調整している。

仮説D「教育課程の開発」に係る仮説

- ①地域の題材を扱った授業を受けることで、総合的な学習の時間における探究型学習をより内容の濃いものにできる。教科横断的な科目を受講することで地域の現状や課題を広い視点で捉えることができるようになる。
- ②地域の題材に関する調査研究を行うことで、教員自身の地域に対する愛着が強くなる。調査研究を通して教員の指導力が向上する。
- ③学校外における学修として単位認定することで、地域における活動を活性化できる。

【進捗状況】 2つの学校設定科目「My エリア・ラーニング」「ふるさと探究」の年間指導計画を作成済みで、令和2年度から開講する予定。「My エリア・ラーニング」は令和元年度末に開講予定だったが連携先との調整に時間がかかり令和2年度はじめからの開講に変更した。

【成果及び評価】 開講が令和2年度であることから評価は来年度以降。年間指導計画は完成しており、教科・科目の内容(別添)は「社会に開かれた教育課程」を先取りしたものになっている。

【課題及び改善点】 初年度となる2つの学校設定科目を成功させること。なお、令和3年度開講予定だった「ふるさと探究Ⅱ」については、教科横断的な要素を強めることで、その内容が「地域理解発展研究」と似通ったものになることから両者を統合して総合的な探究の時間に「ふるさと探究発展」として実施する。

2 生徒の変容と地域の期待

【1年次生徒】

1年次生にはジモト大学の参加を義務付けている。このため、地域の団体、大人と関わる機会が保障されており、これを機会に地域の中に探究活動の協力者を得る生徒も見られ始めた。また、地域理解プログラムを従来の「課題解決型」から「可能性発見型」の学びに方針転換して「新庄市でできること」をテーマに学びを進めてきたが、より自由かつ前向きな発想ができるようになり、総合的な探究の時間に対する



取り組み姿勢が過去の生徒と比較しても格段に良好であった。なお、探究コースでは近隣の新庄小学校との交流も行われており、4年生を訪問したハロウィン企画、6年生がそれぞれ考えた「平和都市宣言」について高校生の意見を聞くといった活動が展開された。

他校の生徒と比較すると、本校生徒の思考の特徴が見える。ジモト大学において、高校生に探究テーマを挙げさせる場面があったが、他校の生徒は「飢餓と貧困」「ウェディングプラン」といった規模が大きく、漠然としたものを挙げた。一方、本校の参加生徒は「大蔵村のイベントを一つにつなぐ」や「新庄・最上地域の投票率アップ」、「商店街の空き家活用」など地域の視点かつ高校生にもできそうなテーマを挙げていた。これは「地域理解プログラム」で培った発想（「高校生にできる地域活動」）や前述の小学生との交流活動に基づいており、地域に目を向け、自分たちが確実にできることから始めていく意識が醸成されていることを示している。

さらに、消費する付箋の枚数、KP法の紙芝居の書き込み量も例年より増えている。次年度の一般コース「課題研究」、探究コース「地域理解発展研究」のベースとなる学びになったと言える。

地域探究部の新設の影響も大きい。専属の生徒は少ないものの、ジモト大学や地域のイベントに参加する中で地域での知名度、注目度が上がり、地域行事への参加の声掛けなどが日ごとに増えている。こうした行事・イベントへの参加は生徒の主体性や表現力の向上を促しており、12月に山形大学で開催された『学びのフォーラム』では1年次の女子生徒が多くの教育関係者の前で「学校からの課題によって高校生の学びが阻害される事例」を的確な事例によって説明し、高い評価を得た。

部員の活動の様子は市報にも掲載され、地域の目が集まり、評価されていることに自己肯定感を得ているようである。町中でも地域の方に声を掛けられる機会が増えたという話も聞こえてきており、高校生と大人のつながりが強くなってきていることは間違いない。「地域について考え、行動することが当たり前」という姿勢が1年次全体に拡大しているとも感じている。



山形大学で説明する生徒

【2年次生徒】

探究コースは地域理解発展研究におけるフィールドワークにおいて、校外の団体や人材との結びつきを構築することができている。生徒の中には自主的に地域活動に参加する姿勢が見られ始めており、4月から新庄市役所と新庄市民が月に1回集まって市の今後の政策を考えるタウンミーティングが開催されたが、生徒は自ら参加申し込みを済ませ、市民の方と一緒に政策を考えるミーティングに加わった。テレビ東京の『池の水ぜんぶ抜く』のロケが新庄市の最上公園のお堀で行われたが、その清掃作



市民と対話する生徒

業に2年次生が数名ボランティアで関わっている。これも自主的な申し込みであった。

生徒が校外への活動の場を広げる中で、生徒たちの探究活動の内容が地域の方々にも知られるようになった。

『新庄市はふるさと納税で税収を増やせるか』を研究しているグループに対して、新庄市総合政策課が彼らのためだけの資料を作成して下さり、『高校と地域活性化～最上校から考える～』のグループに対しては本校最上校



の酒井孝教頭が多忙の中、本校を訪れて生徒たちに助言と情報提供をして下さった。さらには、『奥羽新幹線は実現すべきか』をテーマに研究していた2年次探究コースの生徒に山形新幹線新庄延伸20周年記念シンポジウムへの参加要請があり、生徒の発表に対して関係者から絶賛を得ている。

地域に自分たちの探究活動を理解し、協力して下さる人々がいるということは生徒たちの心の支えになっている。支えていただいている恩に報いるために、探究活動を結実させようとする意識が生徒たちに芽生えており、学校側と地域側の相互連携に加え、相互で生徒に働きかけることで地域を牽引する『人財』育成は進むのである。

一般コースの生徒の中にも変化は見られている。探究コースと比較して、一般コースの生徒には地域に働きかけを行なおうとする生徒は少ない。しかし、校外・他校には地域で何らかの活動を起こしたいと考えている生徒は多数おり、学校枠を超えて地域で活動をする生徒が増えている。実例を2つ紹介したい。一つ目は地元の高校生のアイデアである『ゾンビ商店街』の映画作成である。地域の声掛けによって本校の演劇放送部の生徒が出演し、6月と9月に上映会が行われ、マスコミでも紹介された。二つ目は高校生のアイデアによる「パフェの開発」である。本校生徒がプロジェクトリーダーとなり、新庄南高校や新庄東高校の生徒らとともに町の名物をつくろうとした活動である。こうした事例が生徒全体で共有され、自主的に活動を始める生徒が増えることに期待したい。

【3年次生徒】

3年次生は1・2年次生徒比べると新庄・最上LINKプロジェクトの恩恵を受ける面が多くはなかった。しかし、地域探究部へ入部（兼部）をしている生徒が9名いること、5月上旬に実施された青山学院大学・黒石いずみゼミの新庄市内フィールドワークに参加を希望した生徒がいたこと、ジモト大学における東北芸術工科大学主催のサマーアイデアキャンプへの参加を検討（実際はオープンキャンパスと重なり、参加できず）した生徒がいたことなどから地域に対する関心を確実に持っていることがわかる。生徒のこうした意識を高め、実際の行動を促せなかったことは反省点であるが、新年度から戸沢村役場で職員として働くことになった生徒は地域でできることを考えるべ



く、2月に東北芸術工科大学で実施されたスーパー・コミュニティ・ハイスクール（以下SSH）に参加した。移動のバスの中での新庄市役所やとらいあ関係者との交流、SCHで全国の高校生や大人の活動を知ることが強い刺激となり、戸沢村の地域活性化のために高校生と協力して企画を立ち上げたいという志を持っている。この生徒は山形県立小国高等学校の生徒が企画・運営した「全国小規模校サミット」の取組を知り、自分と同じ高校生が全国の高校生を巻き込んだ活動をしていることに感銘を受けたのだが、他校の生徒の実践を紹介することが生徒の地域活動の動機づけになることが見えてきた。

【地域の支援】

高校生の変容には地域の大人たちの考え方の変化が影響していると考えられる。高校生を対象とした地元企業の説明会は従来から行われてきたが、この数年の説明会を見てみると、企業の関係者が一方的に求める人材や業務内容を説明する形式ではなくなっている。多数の企業から人を集め、高校生とグルーピングして座談会形式での説明と高校生からの質問に答える形式が主流になっているのである。



今年度は本校1年次生でも実施されたが、生徒たちは地元企業の存在をより間近に感じることができ、質問もしやすかったという。「主体的・対話的で深い学び」を促す対話重視の授業が各学校で推進されているが、この手法に即して、話の聞き手となる高校生の立場に立った説明会への変化は非常に有益なものである。

また、『新庄市報』をはじめとする各自治体の広報誌でも高校生の活躍が紹介されるようになった。『広報 しんじょう』の巻末では地元企業の若手社員と高校生の対話が掲載されるようになり、高校生の広報誌への注目度が高まっている。

新庄・最上地域の地域づくりは、大人が主導する地域づくりではなく、高校生と協働する地域づくりへと変化してきている。各学校における地域学習の成果を発揮する場が、自治体や企業によって確保されていることで生徒の成長はさらに促されている。

その他

【先進校視察】

6月11日から15日にかけて、本校探究推進課長とカリキュラム開発支援員である東北芸術工科大学准教授・岡崎エミ先生、山形県立小国高等学校の教員で先進校視察に赴いている。訪問先は島根県立津和野高等学校、島根県立隠岐島前高等学校であり、両校と関わる公営塾も見学した。

①島根県立津和野高等学校

コーディネーターと主幹教諭が学校全体のつながりを作り、地域全体が生徒に協力。生徒は限られた資源を有効活用して自分たちができる津和野町の活性化を目指している。

同校の同窓会館を利用する形で公営塾の HAN-KOU が運営されており、生徒たちは学び直しや検定資格試験に向けた学習をすることができる。



②島根県立隠岐島前高等学校

生徒と大人が徹底的に対話する学びのスタイルが取り入れられている。対話を通し、生徒は自分にできること、自分とは何かを認識していく。町全体が本気で生徒の学びを支援して



いる他、コーディネーターと教員は綿密な打ち合わせを重ねている。

公営塾として隠岐国学習センターがあり、コーディネーターや学習支援員が常駐している。彼らは島前高校の教員と連携し、生徒を支援する。

昨年まで総合的な学習の時間で生徒と接する際は「支援」や「指導」という言葉を用いていた。しかし、探究推進課長が視察に伺った2校では「伴走」という言葉を用いていた。「支援」・「指導」よりもこの「伴走」の方が生徒の学びにはふさわしいと判断し、新庄北高校でも総合的な探究（学習）の時間においては「伴走」という言葉を用いて、生徒に寄り添い、生徒のペースと一緒に探究のゴールに走っていくスタイルに変更した。

【中核教員事業】

山形県の探究科・探究コース設置校では教員の中から1名が「中核教員」として選出され、以下の事項を主な業務としている。

- (1) 所属校における探究科・コース設置へ向けた校内組織体制を確立するためのコーディネーター的役割を担う。
- (2) 所属校における「総合的な学習の時間」の運用に向けた計画立案、各種レポート様式等の整備をはかる。
- (3) 所属校における探究型学習の推進役としてリーダーシップをとり、自らの専門教科の指導力向上をはかりつつ、職員研修会などでの教科の枠を超えた学びのあり方を提示し、指導のノウハウを紹介する。
- (4) 県内各校における校内研修会等へ参加し、情報提供を行う。
- (5) 生徒が活用する「オリジナル探究学習ノート」の作成の中心的役割を担う。

今年度は中核教員事業最終年度の3年目を迎えたが、以下の3校の先進的な取り組みを本校のカリキュラム作りに活用してきた。

2017（平成29）年度 埼玉県立越谷北高等学校

中核教員の担当教科：英語

2018（平成30）年度 広島県立府中高等学校

中核教員の担当教科：理科

2019（平成31）年度 京都府立福知山高等学校

中核教員の担当教科：数学

埼玉県立越谷北高等学校の理数系育成のための手法、広島県立府中高等学校のルーブリックを活用した評価、京都府立福知山高校の地域を題材とした探究活動及び発表会の運営の手法は本校の探究型学習に積極的に取り入れられ、探究学習ノート製作にも活用されている。また、3年間中核教員による職員研修会を開くことで、職員全体での情報共有と具体的な内容と本校で取り入れるべきポイント検討を行ってきた。



先進校視察と中核教員事業は、新庄・最上LINKプロジェクトを客観的に分析する上での材料ともなっている。今年度で中核教員事業は終了し、新庄・最上LINKプロジェクトの予算も減額されるが、こうした他校の取組を参考にしながら本校の事業の進化につなげていきたい。